

医家芸術 冬季号 目次

60 巻 通巻 626 号 (2016 年度)

年頭所感

日本医師会会長	横倉 義武……………	2
日本薬剤師会会長	山本 信夫……………	4
東京都医師会会長	尾崎 治夫……………	6

第 45 回医家写真展 ……………	8
第 54 回ドクターズファミリーコンサート ……	22
第 60 回邦楽祭 ……………	25
◆悼辞・高橋妙子先生を偲んで……太田 怜 …	33

◇医家随想

臓器提供者

豊泉 清 …………… 35

葉山の友人

穂苅 正臣 …………… 40

チェーホフを読む (9)

藤倉 一郎 …………… 41

『ほんによう＝棒掛け』

—水沢の秋の風物詩

浜名 新 …………… 44

龍の背の理想郷

出来 尚史 …………… 49

小平市医師会研修旅行

白矢 勝一 …………… 56

主治医への遺言

斉藤 三朗 …………… 62

第 13 回サイパン戦跡巡り

美濃部 幸恵

美濃部 欣平 …………… 69

猿年の徒然の記

秋元 光博 …………… 78

謹賀新年 御挨拶 …………… 83

医芸俳壇 …………… 86

医芸柳壇 …………… 87

医芸歌壇 …………… 88

詩 …………… 89

◇アンコール掲載

『メキシコ・オリンピック旅行記念』④

日本医家芸術クラブ 編 …… 91

忘れ得ぬ人々

金成 桂一 …………… 93

思い出のメキシコ

埴 やす子 …………… 105

◇個展を開催

白矢 勝一 …………… 110

透視像 …………… 114

編集後記 …………… 114

表紙の言葉 …………… 7

原稿募集のお知らせ …… 90

年頭所感 2016年(平成28年)

日本医師会

会長
横倉 義武



明けましておめでとうございます。国民の皆様におかれましては、健やかに新年をお迎えになられたこととお慶び申し上げます。

昨年は医療界においてさまざまな動きがありました。まず、団塊の世代が75歳以上となる二〇二五年に向けて、国民が将来にわたって必要とする医療・介護を過不足なく受けられる社会を構築するため、各地域で地域医療構想の策定に向けた具体的な取り組みが始まりました。

日本医師会といたしましても、行政と協力して「かかりつけ医」を中心とした多職種連携による、各地域に即した「まちづくり」を推進してきたところでありますが、地域とのつながりが薄れ、高齢者の孤独死が社会問題となっている昨今、地域に根ざした「かかりつけ医」の存在が、高齢者の尊厳を保ち、住み慣れた地域でいつまでも健康に過ごせる社会を実現するカギであると確信しております。これを土台として、生活習慣の改善対策や各種健診などの生涯保健事業を体系化し、健康寿命の延伸を目指して、時代に即した改革を進めていかなくはならないと考えております。

この「健康」をキーワードとした取り組みが、見受けられるようにな

りました。昨年7月に発足した「日本健康会議」もその一つです。経済団体、保険者、自治体、医療関係団体などのリーダーが集まり、健康寿命の延伸とともに今後の高齢化に比例して増加する医療費の適正化を図ることを目指すものであり、先進的な予防・健康づくりを全国に広げるために組織されたオールジャパンによる取り組みであります。

また、塩崎恭久厚生労働大臣の私的諮問機関である『保健医療二〇三五』策定懇談会からは、将来を見据えた保健医療政策のビジョンとその道筋を示すための提言が発表されました。メンバーの平均年齢が40代という若い方々が医療と介護の本質を踏まえながらも将来を見据え、健康増進や地域づくり、更には保健医

療システムの持続と国際的な貢献など、多岐にわたる意見を述べております。私も、アドバイザーとして参加いたしました。が、すべてが実現できるわけではないとしても、既存の枠にとられない柔軟な発想のまぶしさと貴さを実感いたしました。

昨年9月には、アジア大洋州医師会連合（CMAAO）ミャンマー総会に出席いたしました。各参加国においては、それぞれが独自の歴史的背景を有しております。カンボジアでは大量の虐殺が行われ、ベトナムではアメリカと長期間にわたって戦争が繰り返された歴史があります。一方、ミャンマーでは社会主義の独裁政権から、現在、民主国家に変わろうとしています。こうした国々の方々が、口を揃えて述べております。「保険制度がないので、病気の時に医療にかかれなないので、とても不安である」と。私は会議を通じ、

彼らは総じて勤勉であることから、医療体制が整い、国が安定さえすれば、経済発展を実現できると確信すると同時に、わが国の国民皆保険の素晴らしさを再認識いたしました。

また、ミャンマー政府とミャンマー医師会との懇談の場においては医療体制に関する相談を受け、日本医師会として今後、ミャンマーにおける国民皆保険の導入や医療人材の能力開発に協力していくと申し上げたところであります。

世界に誇るべきわが国の国民皆保険は、戦後、まだ発展途上であった一九六一年、生活のインフラ整備のための相互扶助による保険制度として確立されたものであります。決断された当時の政治家、経済界、労働界のリーダーの方々のご苦労に思いを馳せると、その先見の明に頭が下がる思いです。当時の人口は約九千五百万人。以後、高度成長も相まっ

て増え続けることになりました。すなわち、それ以降の医療政策については、人口増加と経済成長の時代を背景として議論が展開されてきたわけであります。

わが国の人口は二〇〇八年前後の約一億二千八百万人をピークに減少に転じており、二〇五〇年頃には一九六一年当時の水準にまで減少するとも言われております。世界中のどの国にも先立ち、少子高齢化に伴う人口減少社会を見据えた医療政策は避けられず、過去の経験にばかり頼ってはいられません。何よりも、その時代を生きていくのは、紛れもなく私どもの子や孫の世代です。これらの世代に負の遺産を背負わせないためにも、われわれの世代で道筋を立てておかねばなりません。

昨年10月、前年に引き続きわが国にノーベル賞受賞者が誕生いたしました。特にノーベル生理学・医学賞

の受賞は、利根川進教授、山中伸弥教授に続く3人目の快挙であります。近年、世界を震撼させたエボラ出血熱の感染拡大や韓国で蔓延したMERSなど「感染症に国境はない」と言われている中で、「グローバルヘルス」と呼ばれる全世界的な保健医療に関する課題解決が大きく注目されております。今回の大村智教授の受賞は、「超高齢社会における医療」という未知の領域を切り開き、それを世界に発信していかなければならないわが国に対する最上のエールに思えてなりません。

世界一の長寿国であるわが国が、健康寿命においても世界一であることが、昨年8月、英医学誌『ランセット』で発表されました。そのベースにある国民皆保険という貴重な財産を、地域医療提供体制を維持する基本的な仕組みとして守り抜き、次の世代に引き継いでいくことこそ、

われわれ世代に課せられた責務です。日本医師会は「国民と共に歩む専門家集団」として、世界に冠たるわが国の国民皆保険を堅持し、国民の視点に立った多角的な活動によって、真に国民に求められる医療提供体制の実現に向けて、本年も執行部一丸となつて対応して参る所存です。国民の皆様方の深いご理解と格段のご支援を賜りますようお願い申し上げます。年頭のごあいさつといたします。

日本薬剤師会

会長
山本 信夫



新年あけましておめでと〜うござい

ます。皆様におかれましては、輝かしい新年をお健やかに迎えのこととお慶び申し上げます。平素より日本薬剤師会の諸事業に格別のご理解とご協力を賜っておりますことに、厚く御礼申し上げます。

人口減少と高齢化の一層の進展が見込まれる中、持続可能な社会保障制度の実現と、次世代への責任という視点に立った改革に向けた取組が本格化しています。超高齢社会にあつては不可欠な医療・介護・予防・住まい・生活支援を、一体的に提供する「地域包括ケアシステム」の構築に向けた取組が始まり、医療保険制度においては、財政基盤の安定化、負担に関する公平性の確保、給付対象の適正化等、給付と負担の均衡が取れた制度構築のための施策が講じられています。

昨年は、6月に閣議決定された「経済財政運営と改革の基本方針二〇一

五」(骨太の方針)において、薬剤師による効果的な投薬・残薬管理や医師との連携によるかかりつけ薬局の推進と、診療報酬における調剤業務の妥当性と保険薬局の貢献度による評価や適正化の方向性が明確にされました。一方、薬剤師と薬局について、そのあり方に変革を求める方針が相次いで示されました。9月には、かかりつけ薬剤師が常駐する薬局を基本とし、医薬品等の安全・適正な使用に関する助言と、専門職種や関係機関と連携した地域住民による主体的な健康の維持・増進を支援する機能を併せ持つ薬局を「健康サポート薬局」と位置付け、そのあり方が厚生労働省の検討会より公表され、10月には、「患者のための薬局ビジョン」が厚生労働省より公表されました。健康サポート薬局がかかりつけ薬局の基本的機能を備えている必要があることを踏まえ、薬局ビジョ

ンには、薬局を患者本位のかかりつけ薬局に再編するための薬剤師と薬局の姿とともに、「門前からかかりつけ、そして地域へ」と医薬分業の目指すべき方向性がわかり易く示されています。さらに、厚生労働省は、ビジョンの実現に向けて、24時間対応や在宅対応等における地域の薬局間での連携体制構築のための取組、健康サポート機能の更なる強化に向けた地域の先進的な取組など、薬局のかかりつけ機能の強化のためのモデル事業に関する予算を要求しています。

本年4月に予定されている診療報酬・調剤報酬の改定の方向性も、国の進める施策を反映したものであることが想定されます。高齢化が急速に進む中、住民・患者から信頼されて選ばれる「かかりつけ薬剤師」、かかりつけ薬局」が、地域包括ケアシステムの中でかかりつけ医を始め

め多職種と連携して患者の安全確保と医療の質の向上を図り、薬物療法における安全性・有効性の確保と医療保険財政に貢献する医薬分業制度を一層普及・定着させるとともに、地域住民の健康をサポートしていくことは極めて重要であり、私たち薬剤師の大切な使命であると確信しています。社会保障制度改革への取り組みが本格化する中、薬剤師を取り巻く環境も大きく変化しています。かかりつけ薬剤師・薬局として、患者が使用する医薬品の一元的・継続的な薬学管理指導を担い、薬と健康等に関する多様な相談に対応するとともに、地域に必要な医薬品等の供給体制を確保し、国民にとって必要不可欠な存在となれるよう、薬剤師の原点に立ち戻り力を尽くしていく所存であります。

本年は申年です。「申」は物事が進歩発展し、成熟に至るまでの伸び

をあらわすとされています。

本年が、皆様方にとって希望に満ちた進歩発展の年になりますことをお祈り申し上げますとともに、本会事業にこれからも変わらぬご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。新年の挨拶とさせていただきます。

東京都医師会

会長

尾崎 治夫



明けましておめでとうございます。
日本医家芸術クラブの皆様方におかれましては、お健やかに新年をお迎えのこととお慶び申し上げます。

日頃は、東京都医師会の会務運営並びに諸事業にわたり、格別のご協力を賜り厚く御礼申し上げます。本年も公益社団法人としての使命を果たすべく着実に活動をしてまいりますので、引き続きご支援ご協力を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

東京都医師会は、来年3月に現在建築中の新会館がいよいよ竣工いたします。工期も順調に進んでおり、既に8階まで建物の骨格は整い、全体像が見えてきております。新会館は防災機能を強化し、数百人規模の帰宅困難者の収容も可能となり、また、救急蘇生や介護手技の習得に役立つ機器をそろえたシミュレーションセンターも完備しております。お近くにお立ち寄りの際は、ぜひ現場をご覧くださいいただければと思います。

さて、2025年に向けて、医療も大きく変わろうとしております。最終的にどのような形になるのか、今のところ見当もつかないのが正直なところであります。

私も東京都医師会では、今期3つの医療政策を掲げ、役員一同、政策実現に向けて活動しております。

医療政策の1つ目は、「2025年に向けた東京にふさわしい『地域医療提供体制』と『地域包括ケア』の構築」、2つ目は、「変容を迫られる医師をしつかりサポートできる東京都医師会」、3つ目が、「超高齢化社会を見据えた都民の予防医療への積極的施策」であります。

特に、一つ目の地域医療提供体制や地域包括ケアの構築には、現時点における地域での病病、病診連携システム構築の進捗状況や、地区医師会と行政との日頃の良好な関係、多職種の方との連携への取り組みが上

手く進んでいることが前提になってまいります。

昨年、ノーベル医学・生理学賞を受賞された 大村 智 北里大学特別栄誉教授のように、あきらめることなく、一つ一つコツコツと地道に物事を積み上げ、最終的に大きな仕事を成就していく姿勢を学びながら、東京都にふさわしい医療提供体制並びに地域包括ケアの構築に尽力してまいりますので、日本医家芸術クラブの先生方におかれましてもご支援ご協力の程を何卒よろしくお願い申し上げます。

結びとなりますが、日本医家芸術クラブの限らないご発展と各位のご清祥を祈念いたしまして、新年のご挨拶とさせていただきます。

表紙の言葉

茨城県つくば市 榎本 貴夫

『赤富士』

古代人にとって天上と、この世を結ぶバイパスは天高くそびえ立つ山であったことは想像に難くない。そのような中で狩猟採取を生業とした縄文人にとって山そのものが単なる通路ではなく「依り代」として神格化していったに違いないのである。霊峰富士はその最もたるものである。コノハナサクヤヒメを祭つてはいるが御山そのものが男富士か女富士か、やさしい問題ではない。そこで古くから幾多の画家がその正体を暴く挑戦をしてきたのである。この度、私も箱根に隠れ潜み朝日が昇る刹那を待つて、ドンキホーテを気取りこの怪物に挑んでみたのである。

(第六十三回 医家美術展出展作品)

第45回 医家写真展

平成27年10月14日(水)～198日(日)

JCII フォトサロンにて

昨年に引き続き、今年も千代田区にあるJCIIフォトサロンにて、十月十四日から十八日に第四十五回医家写真展が開催されました。

二十一名の会員により四十二作品が展覧され、今回も力作揃いの写真展となりました。

最終日に行われ

た懇親会では、写真家の先生に参加していただき、アドバイスをいただきました。

ここに展覧作品をご紹介します。写真は当クラブホームページでも閲覧できますので、どうぞご利用ください。日本医家芸術クラブホームページへは、『医家芸術 写真部』

にて検索していただくとご覧いただけます。または左記のURLへアクセスしてください。

【<http://www.ika-geijyutsu.jp/html/shashin.htm>】



◆石井 光子

『バレリーナ?バレリーノでしょ!』

メルボルンにて』

『新宿副都心』



バレリーナ?バレリーノでしょ!

メルボルンにて

評…【入賞】青空下での大道芸人を手前いっぱいに入れて、左端に街の通行人を入れたことで雰囲気が出ました。



新宿副都心

評…直線と曲線の建物、下方のリング状のモニュメント、子供の頃描いた未来都市が表現されています。

◆岩瀬 光

『ボウ湖と太陽』

—カナダロッキ—

『朝のモレーン湖』

—カナダロッキ—



ボウ湖と太陽
—カナダロッキ—

評…湖面がおだやかなのでとてもきれいに風景が映し出され、また太陽と山の位置が絶妙です。



朝のモレーン湖
—カナダロッキ—

評…湖の青、山にかかる雪の白、と自然の色に目を奪われます。手前に木々が見えているのも画面を引き締めていて素敵です。

◆大武 秋笙

『紅（くれない）匂う』

『緑陰』



緑陰



紅（くれない）匂う

評…太陽を背に逆光でとらえた紅いシヨールの質感がよく出ています。

評…鮮やかな緑の葉が目を射し、萌える春の雑木林を見たくになります。露出もピタリでした。

◆大森 佐一郎

『斜光―美人林』
『雪囲い―神宮寺』



斜光―美人林

評…晩秋でしょうか。裸木を画面の1／3程度遠くに入れ、下方に枯れ葉をローアングルでいっぱいに入れたことで、冬の存在感が強調されました。



雪囲い―神宮寺

評…白黒に変換したことで、雪の日の寒さが出ました。雪粒も写っているのも良かった。

◆木村 典子

『クスコ巨石の中で』
『マチユピチュ段々畑』



クスコ巨石の中で

評…巨石が左手前から右奥まで連なっている様が奥行きを感じられています。光の具合もいいです。手前の巨石が黒く、奥の石が白っぽくみえていいるのも広がりを感じさせます。



マチュピチュ段々畑

評：【入賞】奥の山肌をいれたことで、とても標高の高いとところだと伺い知れます。濃さの違う緑がいくつか画面に入っている所も素敵です。

◆斎藤 三朗

『泰山木が咲いた』

『ちーちゃんもサイン』



泰山木が咲いた

評：強い陽でできた葉の黒い影をバックに、白い花をドーンとおいて正解です。



ちーちゃんもサイン

評：文句なしの笑顔。細目にもしっかりとアイキヤツチが入っています。

◆佐々木 正

『世界最大の瀑布―悪魔の喉笛―』
『遺跡に集う』



世界最大の瀑布―悪魔の喉笛―

評…【銀賞】画面の80%以上を瀑布の形相を入れたのが迫力の写真になりました。光る水面と遠くの景色の静けさが、滝口の落水の動きを強調させています。



遺跡に集う

評…マチュピチュの正面上から撮ったものです。時間帯が良く、光廻りがとてもよく、草の緑が鮮やかに出ています。手前の段々にできた陰もアクセントになっていて、中央の高い山が後の山脈を突き出ているのがいいです。右端の小さく写っている3人の人物が、この山頂のスケールを出していて成功しています。

◆白矢 勝一

『軽蔑』
『追憶』



軽蔑

評…シルエットの男女、黄昏の河辺、そっぽを向いた二人の距離、ケイタイで話し中の女性の髪が夕日に光っている様、それらに男女の心理状態が映っている感じがします。

◆白矢 泰三
『水辺のほとり』
『染まる河辺』

評【銀賞】昏れて街の灯りが灯る頃、追憶にふける後ろ姿の男女。白矢勝一氏の作品には、いつも人間ドラマが映っているような気がします。



追憶



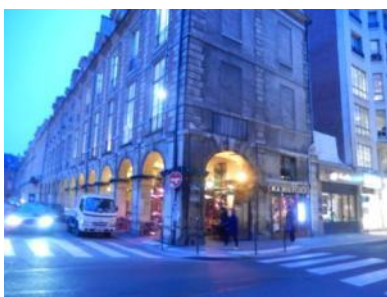
染まる河辺

評…一幅の名画を思わせます。形の
良い大きな樹、水辺に浮かぶ小舟、
見事な構図です。



水辺のほとり

評…ブルーカラーで味のある作品に
仕上がりました。街の幻想的な雰囲気
がでている作品です。お店の照明



黄昏

◆白矢 智靖
『黄昏』
『寒朝』

評…昏れ色で赤く染まる大きな橋、
沿岸の家並み、水に浮かぶ泥舟数隻。
このまま絵に描きたくなりますね。
文句なしの構図です。

のオレンジがアクセントになつていて作品を引き締めています。



寒朝

評…フールドをかぶった男の子と黒い上着の襟を立てて歩くお父さん。寒さが伝わってきます。画面の左の樹右の街灯、後のアパートメント、パリの雰囲気を伝えていきます。スナップ写真はシャッターチャンスが大切ですね。

◆白矢 輝靖

『星降る街』
『静かな夜』



星降る街

評…商店街の星飾りを奥行き感を出して撮影しています。とてもよく撮れています。



静かな夜

評…タングステンカラーで温もりは感じますが、静けさにはブルーカラーがよかったです。デジタルカメラでは夜景は案外易しく撮ることができそうですが、出来上がりの意図を考えて、色温度（カラーバランス）が重要です。そして、シャッターが遅くなるので、三脚かISO感度を上げることがおすすめします。

◆関口 直男

『初秋の雲』

『ガーベラの輝き』



初秋の雲

評…思わず見上げた夏の終わりの雲。広角レンズで出来るだけ高く撮ったのが良かったです。



ガーベラの輝き

評…花の色のバランスは絶妙ですが、正面からストロボ一灯の光なので、花のディテールが少し乏しい感じがします。

◆鷹橋 靖幸

『雨中花』

『可憐』



雨中花

評…左右の緑に挟まれた雨に映く紫陽花。花びらの雨滴にピントをよく

合わせて質感がよくできています。



可憐

評…花を画面の下方に小さく入れたのが良かったです。大きいほうの花のピントが甘かったのが残念です。



◆竹腰 昌明

『夕映えのカセドラル・ロック』

(セドナ)

『絆 (カリブ)』



夕映えのカセドラル・ロック
(セドナ)

評…絶好のチャンスがモノにできました。岩の並び、火砲の陰の入れ方の量、染まる岩たち。質感がよく出ています。巡りあいたい風景です。」



絆 (カリブ)

評…【銅賞】灼熱のカリブの海辺。しっかりとママの手に握られた女の子の笑顔がいいです。夏のスナップ写真の逸品です。

◆逸見 和雄

『千本桜』

『児玉千本桜』



千本桜

評…日本人なら誰でも撮りたくなる桜。しかも並木になっていけるとそれだけでワクワクしてきます。邪魔なものがなく、画面にまとまりがあり良いです。空の割合もいいです。



児玉千本桜

評…桜の紅、空の青、雲の白、草木の緑と自然の色のバランスが素敵です。雲の明るい部分に目が行きがちなので空の割合をもう少し少なくしてもよかったかもしれません。

◆本村 美雄

『傘雲（富士河口湖町）』
『サーフィン（ワイキキビーチ）』



傘雲（富士河口湖町）

評…富士の傘雲の写真は多く見られます。富士にかかった傘雲の色と形、左の上にある動きのある雲、そして富士の左の麓にある黄色い雲といい、湖の輝きもあり、見せ場が少し多すぎるのが気になります。思いきって傘雲に絞ってアップで撮ってみてもよかったかもしれません。



サーフィン（ワイキキビーチ）

評…紺碧の海、真っ白い波、本当にデジタルカラー写真に仕上がりました。青い空と碧い海、白いコスチュームのサーファーと白い波がこの作品のすべてです。上部の船をなくして、中央のサーファーに目が行くような構図にしても面白かったかもしれません。

◆本村 香都子

『アルビー（南仏）の橋』
『ワイキキの昼下がり』



アルビー（南仏）の橋

評：【入賞】重厚な歴史的な橋が前と後ろに、その向こうに建物があり、遠近感の表現が素敵です。何よりもこの写真の良いところは、水辺の漣みが美しいことです。



ワイキキの昼下がり

評：夏の海辺ではよく見られるスナップですが、デジタル色の強いコントラストの海とよく焼けた肌の女性が生々しいです。左のパラソルの紐が風に揺れている様に海風が映し出されていて涼しく感じられます。

◆松本 俊一

『秋空と実る大地』
『白鬚の滝と青い川』



秋空と実る大地

評：空を80%入れて秋の空を表現した作品です。美瑛の丘の青い屋根の家をポイントに北の大地を気持ちのいい写真に仕上げています。



白鬚の滝と青い川

評…まず露出がどんぴしゃです。ただ、被写体が少し小さく写っているので、迫力が乏しいのが残念です。倍の画角のレンズで大きく引っ張って写したら迫力のある写真が撮れたと思います。

◆村上 泰
『白花ぼけ』
『アマリリス』



アマリリス



【銅賞】白花ぼけ



華光院の火渡り

◆矢崎 定造
『華光院の火渡り』
『神興の川渡り』

評…構図とピントはどちらも申し分ありません。三脚使用かと思われるほど、色調・ピントが美しく決まっています。

評…燃え盛る炎と杓と桶を持つ若僧。合掌する老僧と見物人がやや説明的ではありますが、報道写真のように的確に表現されている作品です。



神輿の川渡り

評…傾いて今にも倒れそうな神輿を捉えたタイミングの良い作品です。そして、前で担ぐ三人の表情、さらに後方の倒れそうな神輿の下で必死の表情の男性が緊張感を引き立たせています。

◆山本 健一

『ドレスデンの朝』 『エルベの流れ』



ドレスデンの朝

評…朝日をうけて流れるエルベ川のほとり、古い都市の建物が並んでいて美しいです。淡く染まった千切れ雲が浮かぶ空。この見ごたえある風景を、パノラマ風に撮って成功しています。構図・ピント・露出全て申し分ありません。自転車的人物は、も

う少し待って入れない方がよかったかもしれません。



エルベの流れ

評…【金賞】流れるエルベ川。悠久の刻を流れた川と老人たちが平和なひとときを過ごしている素敵な作品です。青い空に白い雲、岩山を指して何を語らっているのか、遠い月日をおぼろげに何とも長閑な素敵な写真にまとまりました。傑作です。

第45回 医家写真展 作品目録

(2015 年 10 月 14 日～18 日)

氏名	作品Ⅰ	作品Ⅱ
石井 光子	バレリーナ？バレリーノでしょ！ メルボルンにて	新宿副都心
岩瀬 光	ボウ湖と太陽 —カナダロッキー—	朝のモレーン湖 —カナダロッキー—
大武 秋笙	紅(くれない)匂う	緑陰
大森佐一郎	斜光—美人林	雪囲い—神宮寺
木村 典子	クスコ巨石の中で	マチュピチュ段々畑
斉藤 三朗	泰山木が咲いた	ちーちゃんもサイン
佐々木 正	世界最大の瀑布 —悪魔の喉笛—	遺跡に集う
白矢 勝一	軽蔑	追憶
白矢 泰三	水辺のほとり	染まる河辺
白矢 智靖	黄昏	寒朝
白矢 輝靖	星降る街	静かな夜
関口 直男	初秋の雲	ガーベラの輝き
鷹橋 靖幸	雨中花	可憐
竹腰 昌明	夕映えのカセドラル・ロック (セドナ)	絆(カリブ)
逸見 和雄	千本桜	児玉千本桜
本村 美雄	傘雲(富士河口湖町)	サーフィン(ワイキキビーチ)
本村香都子	アルビー(南仏)の橋	ワイキキの昼下がリ
松本 俊一	秋空と実る大地	白髭の滝と青い川
村上 泰	白花ぼけ	アマリリス
矢崎 定造	華光院の火渡り	神興の川渡り
山本 健一	ドレスデンの朝	エルベの流れ

第54回ドクターズファミリーコンサート

2015年11月8日(日)シラヤアートスペースにて開催

医家芸術 ドクターズ・ファミリーコンサート 2015年11月8日



開会の挨拶 松木 耀子

- 1 女声コーラス ピアノ 刑部 美也子
 小川 昭子 (狛江市・小児科) 広瀬 珠恵 松木 耀子 (小平・眼科) 和田 幸代
 1 眠りの妖精 作詞 堀内敏三 ドイツ民謡
 2 浜千鳥 作詞 鹿島 鳴秋作曲 弘田 龍太郎

- 2 ハープデュオ 大野 ますみ (千葉・皮膚科) 共演: 細沼 秀行
 1 魔法の鈴 「オペラ魔笛」より W A Mozart
 2 アヴェ・マリア J.S Bach J.F Gounch



- 3 ピアノ独奏 武井 智昭 (横浜・耳鼻科)
 1 渚のアデリーヌ Paul de Senneville
 2 Summer 久石 譲



- 4 ピアノ独奏 清水 裕子 (武蔵境・眼科)
 1 ボロネーズ軍隊 ショパン

- 5 独唱 (ソプラノ) 松木 耀子 (小平・眼科)
 1 恋はやさし 野辺の花よ Franz von suppe
 2 オーソレミオ (私の太陽)



休憩10分

- 6 ギターの弾き語り 白矢 勝一 (小平・眼科)
 1 愛さずにはいられない 2 知りたくないの

- 7 JAZ 演奏 クラリネット飯塚 崇志 (横浜・皮膚科) ピアノ萩野 仁志 (町田市・耳鼻科)
 ベース佐々木 建志 (町田市・乳腺外科) ドラム 有吉 拓
 1 Cherokee (チェロキー) 2 Round mid night



- 8 独唱 (テノール) ロベルト ディカンディド
 1 星は光らぬオペラ「トスカ」より作曲: プッチーニ
 2 Be my love 作曲: ニコラス ブロドツキー

- 9 オーケストラ 飯塚 崇志 指揮: 近藤 敦子
 1 モーツァルトの交響曲40番第一、三楽



閉会の挨拶 萩野 仁志

休憩15分

懇親会

- 10 独唱 (ソプラノ) 安孫子 みどり
 1 Melodia sentimental 作曲 H.Villa
 11 バンド 白矢 勝一 中野 小平・産婦人科 井上 斉 (小平・耳鼻科)
 1 ザブルーハーツメドレー
 12 JAZ 演奏 はぐどばん
 13 (テノール) ロベルト ディカンディド



昨年11月8日に行われた洋楽部主催のドクターズファミリーコンサートが、東京都小平市にある白矢眼科医院併設のシラヤアートスペースにて開催されました。

お馴染みの先生方に加え、今回初参加の方やオーケストラも参加し、盛大なコンサートになりました。

洋楽部部長の松木眼科の松木耀子先生を始め、女声コーラスのみなさん、クラリネットの飯塚先生、バンド「はくどばん」やテノール歌手のロベルトディカンデイドさん、白矢勝一先生のギター弾き語りなど、常連のメンバーがコンサートを盛り上げる中、初登場の大野ますみ先生はハープを披露して下さり、武井先生、清水先生はピアノ演奏、そして今回は何よりドクターズファミリーコンサートにオーケストラが復活いたしました。限られたスペースの中でしたが、とても迫力のある演奏で会場

を魅了していました。

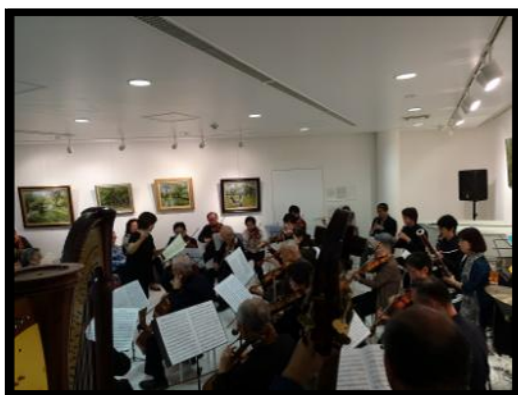
コンサートの第一部終了後は、軽食や飲み物も提供され、終始和やかなムードで、ご参加された方も楽しそうでした。

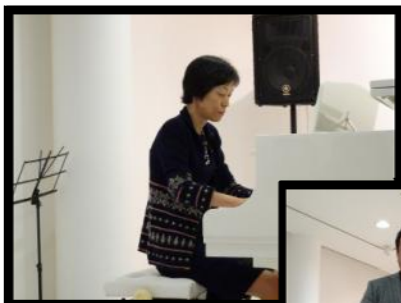
第二部ではソプラノ独唱あり、ジャズ演奏ありとバラエティ豊かなプログラムに加え、白矢勝一先生率いるバンドが初参加して下さいました。メンバーは同じ小平市の先生方と、いつもファミリーコンサートの司会でお世話になっている玉澤明人さんです。ロックバンドのザ・ブルーハーツの曲をメドレーで披露しました。会場と一体になり賑やかで楽しいひとときでした。

来年もドクターズファミリーコンサートを開催する予定です。一二年後にはヤマハホールで開催したいと考えています。次回の出演者大募集です。観覧のみも大歓迎です。是非足をお運びください。日程など決

まりましたら、日本医家芸術クラブの機関誌『医家芸術』やホームページなどでご報告いたします。

一部ですが、写真を掲載しました。楽しい雰囲気が伝わればと思います。皆様のご参加お待ちしております。





日本医家芸術クラブ邦楽部

第六十回 邦楽祭

邦楽評論家 宮西 芳緒

日本医家芸術クラブ邦楽部《邦楽祭》の記念すべき第六十回公演が平成二十七年十一月二十九日（日曜日）、例年通り日本橋三越劇場で開催された。

当日、会場で配られた資料には、「日本医家芸術クラブ邦楽祭（開始時は洋楽と合同で芸術文化祭と呼んでいた様です）は、今から六十一年前の昭和二十九年に始められたそうです。当時、まだ医家芸術本誌は

創刊されておらず、記録も残っておりません。」とあり、最初の記録となる「第三回日本医家芸術文化祭」（昭和三十三年十二月二十一日、日本相互ホール）の関係者や出演者の方々の様々な思いが記された往時の誌面のコピーを興味深く読ませていただいた。

さて、この日はいままでも増して熱の籠もった舞台の数々が繰り広げられた。今回の内容は、小唄、新内小唄、舞踊、端唄、連吟、長唄、さのさ、清元の全十二番が披露された。

「開会の辞」日本医家芸術クラブ

委員長・太田怜先生。



昼は内科医として末期患者の死と向き合いつつ、夜はシャンソン歌手としてライブハウスなどで歌う宮園洋子先生の歌手デビュー三十周年記念コンサートの話題から、人生の喜びや悲しみを歌うシャンソンと医者としての仕事がいかに役立ち合っていることを例に挙げて、人生と医業と芸術の相互関係を熱く語られた。

一、小唄『勢い肌』『屋台酒』

邦楽祭初参加で、「前回の赤坂での初デビュー」に続き、今回が二度目の



舞台となり
ます」とい
う村中定幸
先生（外科
／川口市）
が、井上恵
美竜師の三
味線に乗っ
て開幕を飾
る。

「勢い肌だよ 神田で育ちや」
伊達も喧嘩も江戸の花」と唄う江戸

つ子氣質と、へどこがいいのか
い気が合つて」へ愉快に飲んで 肩
をたたいて右左 さよなら」とい
うへ男同士の屋台酒」の二題。その
人柄が偲ばれるような唄い口。伊達
や粋、男の美学を、これからも唄い
続けていたきたい。

二、新内小唄二曲『明がらす』『夢の柳橋』

佐々英一先生（ふじ松鶴弥こと。
内科／世田谷区）の唄。糸はふじ松
加奈子師ほか。

一転して、こちらは『尾上伊太八
（帰咲名残命毛）』や『蘭蝶（若木仇
名草）』と並ぶ新内の名曲『明烏夢泡
雪』の新内
小唄バー
ジョン『明
がらす』と、
「柳橋界
隈の風情
をさらり
と表現し
た中にも」
『明烏夢
泡雪』のさ
わりの部
分を「た
つぷり唄っています」という『夢の
柳橋』の二題。新内の纏綿とした情
緒が、そつと、優しい声で客席の隅々



雪』の新内
小唄バー
ジョン『明
がらす』と、
「柳橋界
隈の風情
をさらり
と表現し
た中にも」
『明烏夢
泡雪』のさ
わりの部
分を「た

にまで届けられる。

三、舞踊・清元『北州』

「前割のかつらに立役の素踊りの衣裳は初めての経験なので、とても嬉しく思っております」という大川尚美先生（尾上菊尚こと。小児科／横浜市）は、ご祝儀の名曲で難曲のこの作品に真正面から向き合い（こ



本人は「少し背伸びをして」と謙遜されているが）、初々しい中に「松の位」の風格も見せ、実に丁寧な舞台を務められた。

「小児科医の仕事と、芸事のお稽古と、それにそれらが終わった後たしなむ一杯は、私の人生の大きな三本柱です」とおっしゃる充実した人生が羨ましい。

四、小唄『鶴次郎』『せかれせかれ』

山崎薫先生（春日豊七・山崎薫裕こと。小児科／台東区）の唄。三味線は春日豊七・山崎薫裕ほか。

二十数年前にお稽古しております



した小唄を、この度、二十年振りに「家内より急遽、むりやりに（笑）、出演するようにな言われたため、たった四回のお稽古で、ご披露する次第です」

とおっしゃる山崎先生だが、たとえ二十数年前にしても、稽古を重ねられた小唄の発声は衰えを知らないよ

うだ。これを機に、ぜひとも医家芸術祭のご常連となつていただきたい。

五、端唄『河水』『盆の流し唄』『三下りさわぎ』



今回が三回目
目の出演とい
う高橋杏子先
生（新水豊伎
こと。精神科

／台東区）の

唄。三味線は
新水千豊師ほ
か。

「隅田川の
夏の風情を唄

った」清々しい『河水』徳島市の「盆
の流し」を唄った哀愁を含んだ『盆
の流し唄』に続いて、「吉原で唄われ
たお座敷唄」の『三下りさわぎ』で
はへめでためでたの若松様よ」と誠
に僭越ではありますが、邦楽祭のさ
らなるご発展を祈願して賑やかにめ
めたいと思います」というご趣向。
艶やかな声で、明るく、華を添えら
れた。

六、連吟（喜多流）『井筒』

平野宏先生（外科／練馬区）ほか。

ありつね

「有常の娘が、業平の形見の衣裳

を纏って現われ、舞を舞い、井戸の
水鏡に我が身を映して業平を偲び、



やがて夜
明けとと
もに消え
去って行
く……
「筒井筒」
「くらべ
こし」の相
聞歌で知
られる『伊

勢物語』の一節をモチーフとする曲。

へ紀有常が娘とも、または井筒の女
とも」名のり、へ井筒の蔭に隠れけ
り」と姿を消す前シテ。業平への尽
きぬ想いを抱く井筒の女の幽けき姿
を描いて、四人の声が重なる連吟の

深みが響いた。

七、舞踊・義太夫『鷺娘』

今回が二回目の出演で「現在、私は大学院生活も四年目で、卒業まで残り四ヶ月となり、慌ただしい毎日を通^へしています」という小島杏里先生（尾上杏里こと。齒科／新潟市）は、歌舞伎の興行や日本舞踊の会な



どでよく上演される長唄の方ではなく、義太夫はなべんの人（おどり）は花菱『花菱四季寿』の中の冬の曲の『鷺娘』を踊る。

鮮やかに引き抜いて二本傘の扱いも初々しく、可憐な娘の踊りで舞台も華やぐ。長唄版と違って最後は責メとはならず、めでたく幕を切る。後見を尾上菊方師。

番外、六十周年記念『口上』幕が上がると出演者全員が居並び、一言ずつ口上を述べる。「実はこれをやったかった」という太田怜先生が



「今後とも」最^{こゝろ}真^{まこと}お引き立てのほど、隅から隅までずい^{こゝろ}と冀^{こゝろ}い上げ奉ります」と幕を切る。

八、連吟（喜多流）『山姥』

鈴木浩之先生（外科／練馬区）ほか。

「遠^{おちこち}近^{あちこち}のたつきも知らぬ山^あ中に」上^あ路（新潟県糸魚川市）の山姥を謡った難曲中の難曲に挑む鈴木先生は、「この曲は禅問答の真骨頂を人間の世界に置き替えた秀



作だと
言われ
ます。深
山幽谷
の雄大
さと深
さを持
った大
曲。どう

ぞお楽しみ下さい」とおっしゃって、
「山めぐりするぞ苦しき」人生の哲
理を問うような内容に、真摯に、心
静かに向き合っている感じがする。謡
い手の人生が映される名曲であるこ
とが伝わる。



丸、長唄『二人腕久』

山崎律子先生（杵屋勝くに子こと。

皮膚科／台東
区）、松永忠次
郎師ほかの唄。
三味線は杵屋
勝国師ほか。
囃子入り。

「いよいよ行く」

「いいまは心も
乱れ候」杵屋
勝国師のリー
ドで、「行く
水に」しっと
りと、「思い
ざしなら」な

かど

ど廉々をきつちりと描き、「月の漏

るより」からはしんと空気を鎮めて

たつぷりと唄い、「お茶の口切り」

「わさくれ」あて「按摩けんぴき」あて「廓々

は」へと、歌舞伎の舞台を髣髴とさ

せて盛り上げる。今回「私にとつて

も二十回目の記念の出演となります

ので、この大曲に挑みました」とい

う山崎先生の意気込みが伝わる。

十、さのさ他、さのさ『車引き』

小唄『緋鹿の子』

山田新太郎先生（整形外科／練馬

区）の唄。三味線は伊吹清寿師。

「今回は浄瑠璃入りのさのさ『車
引き』と、声色入りの『緋鹿の子』



の二曲を
聴いてい
ただきま
すという

山田先生。

へはい

ほー、片寄

れ片寄れ

から「何と

聞いたか

すがわらでんじゅてならいかがみ

桜丸」と科白になる『菅原伝授手習鑑』

車引のさのさは、梅松桜の三つ子の

三兄弟の絵面を描き、もう一曲の

べんてんむすめおのしらなみ

『弁天娘女男白浪』浜松屋の小唄で

は弁天小僧菊之助の見頭わしの名調

子を聞かせ、いずれも大歌舞伎の名

舞台をコンパクトに洒落た掌曲を楽
しませて下さる。芝居好きの心意氣
が漲り、機嫌のいい一幕。

十一、清元『神田祭』

太田怜先生

(循環器科／世

田谷区) は、清

元延志佐師ほか

と浄瑠璃を語る。

三味線は清元志

寿造師ほか。「每

回、私の清元で

ワキを唄ってい

ただいた穂坂美

和子さんが、今



回は本業の坂東蝶で立方をしていた
だくことになり、その御母堂にあた
る穂坂寿和子様に三味線方を受け持
つていただけることとなりました。」

「主として立方の踊りの方を見て
いただき、一部、地方の方にも耳を
傾けていただければ幸いです」と
と太田先生。

お得意の清元の名曲で、気心の知
れたメンバーとともに粹に描き出す
江戸前の空気が場内を満たしていた。

十二、長唄『二つ巴』

今回も切を勤めるのは前村八重子
先生(杵屋和重二こと。小児科／東
村山市)で、年季の入った達者な三



味線を披露する。十一代目家元・芳村伊十郎師ほかの唄、前村先生と杵屋栄敏郎師ほかの三味線。囃子入り。

文楽や歌舞伎でお馴染みの『仮名手本忠臣蔵』七

でほんちゆうしんくら

段目一力茶屋の大星由良之助

(大石内蔵助)

の遊興の場と、

高師直(吉良上

野介)屋敷への

討入りの場を併

せて、由良之助

の家紋「二つ巴」

に準えた曲。

へ花に遊ばば」

浮き立つ茶屋場に始まり、大薩摩も

重厚に、みごと本懐を遂げる大詰へ

きつぱりと弾き分けて、大きな舞台

を描き出された。「時はよし、十二月

十四日を前に、この曲が弾けますこ

とを嬉しく思っております」とは、

前村先生の言葉。

「閉会の辞」日本医家芸術クラブ

文芸部邦楽部委員・山田新太郎先生

が六十回記念公演が無事終了したこ

との御礼を述べ、最後に「お楽しみ

(?)」で、日本医家芸術クラブ委員

長・太田怜先生の「声色」が披露さ

れる。

十五代目市村羽左衛門の『三人

さんにん

吉三巴白浪』大川端のお嬢吉三で喝采を浴びた。



プログラムに高橋妙子先生の計報が掲載されていた。この邦楽祭の実

邦楽部として長年に渡って心血を注がれ、ご自身も数々の名舞台を見せて下さった。六十回記念の会が無事幕を下ろしたことを、きつと喜んでいらつしやることだろう。

次回、第六十一回《邦楽祭》は平成二十八年十一月二十七日（日曜日）、同じくここ日本橋三越劇場で開催予定。華甲を祝った《邦楽祭》の新しいスタートに期待したい。

邦楽部

高橋妙子先生を偲んで

太田 怜

一昨年十二月、高橋妙子先生が亡くなられた。その事を邦楽部の誰もが知らず、昨年秋になって邦楽祭の出演者を決めるときになってはじめて発覚したのであった。

先生は、長唄の三味線、日本舞踊など八面六臂の御活躍で長年毎回舞台をつとめられ、邦楽祭ではいわば常連であらせられた。小柄なお体であつたが芸は大きく、邦楽部の華であつた。昨年の邦楽祭は目出たい六十周年の節目で、その折角の日に先



第56回邦楽祭より
(平成22年11月)

生のお姿を見ることが出来なかったのは我々にとつて残念至極なことであるが、先生にとつても心残りの御最後ではなかったかと推量させられる。先生は洋楽部でもマンドリンで御出演、その芸域の広さは余人の及ぶところでないが先生が邦楽部での

こされたものはそれだけではない。

邦楽の演奏では、地方や囃子方が必要で、一公演でも多人数となる。

それに見合うのには三越劇場の楽屋はあまりにも狭すぎるのである。そのため演目が多くなれば楽屋の割り振りは並大抵でない。それにつれてプログラムの順序には苦勞されたことであろう。時には現場に直接行かれて交渉に当たられたこともあった。これまで邦楽祭が滞りなく行われた



第54回邦楽祭より
(平成20年11月)

のも先生の御力の賜物だったのである。

その先生が亡くなられた。我々はその先生に何も報いることなくお別れをしてしまった。その先生があまりにもヒッソリと亡くなられたのでお礼の言葉さえお伝えできなかったのはかえすがえすも残念である。

今はただ先生の舞台姿をしのび、先生の邦楽祭への愛着や御業績への感謝をよすがとして御冥福を祈るばかりである。そして残された我々は先生の御意志をついで、これから先も末長く邦楽祭に研鑽することが、先生へのせめてもの御恩返しかと思っている次第である。



→邦楽祭会場のロビーに飾られた献花台

医家随想



臓器提供者

豊景 清

ある国際団体の奉仕活動に参加してミャンマーを訪れたことがある。ミャンマーは東南アジア諸国の中でも特に仏教が盛んな国の一つで、荘厳な仏教寺院を何ヶ所も参詣する機会に恵まれ、大いに感銘を受けて帰国した。日常生活ではお寺やお経などにほとんど縁がないが、ミャンマー旅行を契機として、仏教に少なからず興味を抱くようになった。そこで仏教由来の日常語の考察を試みてみた。

◆昔は奥様と旦那様を一对に呼んでいた。お寺では檀家という言葉をよく使う。檀家とは一定の寺に所属していて、お寺に金品の布施をする人である。古代インドでは寺に寄進をする信者をダナと呼んだそうである。サンスクリットというインドの言語のダナは「与える」という動作を意味する。仏教界ではダナを漢字で檀那と表記するが、檀の字が難しいので一般には同じ発音で旦那と書く。つまり檀那（旦那）は金品を「寄進する人」が原義である。

他人の命を救うために血液や臓器を提供する人を英語でドナーと呼んでいる。ラテン語で「与える人」を

意味する DONOR（ドナー）が語源である。古代インドの言葉とラテン語には共通の祖語があったという言語学の学説がある。寄進をする人を意味するサンスクリット由来の「檀那」と、提供する人を意味するラテン語由来の「ドナー」は、どちらも D と N という子音から成っていて、ほぼ同じ発音だから共通の語源に由来すると思われる。

◆和英辞典のお経の項目には SUTRA（スートラ）という訳語が載っている。スートラとはサンスクリットの「糸」が語源だそうである。経緯（けいい）という言葉の「経」は織物の縦糸を意味し、「緯」は横糸を意味する。「縦糸」という意味のストラを、中国人の僧侶が「経」の字で漢訳した。「経」は漢音で「けい」と読み、呉音で経（きよう）と読む。お経は釈迦の教えを記述した書物である。つまり人生の規範や、物事の

何
ナ
ナ
ナ
ナ

卒塔婆

道理の筋道を説いた書物である。そこから釈迦の教えを、長々と続く糸のイメージで表したものとされる。
◆葬儀や法事の際に、故人の戒名を書いた細長い板を墓地に供える。その板を卒塔婆（そとば）と呼ぶが、話し言葉では略して塔婆（とうば）と呼んでいる。サンスクリットで高い塔をストウ・パと呼び、英語にもSTUPA という語形が入っている。卒塔婆はストウ・パの音訳であり、本来は高層建築物を指す。仏教界には高い塔を建てるのが故人の供養になるという思想があったが、貧しい庶民は簡単な一枚の板で代用している。見上げるような五重塔も、墓地の細長い板も出発点は同じ発想に

基づくストウ・パである。

◆恵比寿、大黒、弁天、毘沙門、布袋、福祿寿、寿老人の七柱の福德の神を七福神と呼んでいる。特に最初の恵比寿と大黒は一对となつてよく絵に描かれたり、木彫りの置物として飾られたりして親しみ易い存在である。

大黒天をサンスクリットでマハカラと呼ぶそうである。偉大な王様をインドの言葉でマハラジャという。マハは大きい、ラジャは王様という意味である。カラは黒いという意味だから、マハカラは大きな黒と訳せる。つまり大黒はサンスクリットの直訳である。体格がよくて肌の黒い神様がいたに違いない。日本では大國主命と習合して民間信仰にも浸透している。大黒天も大國主命も大きな袋を背負つて同じような姿で描かれている。

大日如来をサンスクリットでマ

ハ・ルビシヤナのように発音するそうである。マハは大きい、ルビシヤナはこの世をあまねく照らすという意味で「日」の字を当てて訳している。つまり「大日」もサンスクリットの直訳である。



大日如来

◆鮎屋では米飯をシヤリという符丁で呼んでいる。釈迦を火葬にしたら、米粒のような骨が何百個も残ったさうである。その骨をサンスクリットでシヤリと呼んだ。米粒が釈迦の骨に似ているので、米飯にシヤリとい

う隠語が生じたという語源説がある。釈迦の骨を納めた建物を仏舍利塔と呼び、仏教界ではシヤリに舍利という漢字を当てている。

◆我慢という言葉を日常よく口にする。忍耐や辛抱という意味で使われており、私どもは我慢を良いイメージとして受け止めている。仏教の解説によると、自己の中心に「我」という概念がある。我慢の慢はサンスクリットのマンという言葉の音訳で、マンとは驕（おご）り高ぶる心という意味だそうである。つまり我慢とは「我」という自意識が驕り高ぶっている状態を指すから、仏教では、それはよろしくないと解釈する。我慢、高慢、驕慢、傲慢、怠慢など、漢字語の「慢」は一樣に悪い意味で使われている。我慢も本来は悪い意味だったが、意味がすり替わって日常語に定着してしまったようである。

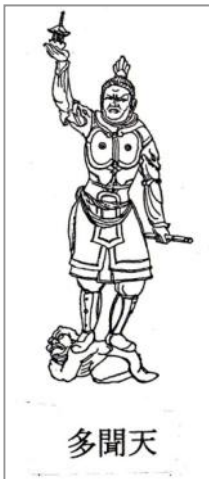
◆監獄に留置されて自由を束縛され

た者が、自由な世界を「娑婆」と表現する。また俗世間の名譽欲などに執着する人を「娑婆氣が多い」と形容する。サンスクリットでは人間が住む現実世界のことをサハのように発音し、娑婆という言葉で表記した。サハは苦痛に耐え忍ぶという動詞が語源だそうである。人生は苦痛や煩惱に満ちているから、人生イコール忍耐という認識が生じたものと思われる。娑婆も古代インドの言葉に由来する。

◆ある集団の中で特に優れている者が三人いると「三羽鳥」と呼び、四人いれば「四天王」と呼ぶ。例えば大江山の酒吞（しゅてん）童子を退治した源頼光の四天王は、渡辺綱、坂田金時、碓氷貞光、卜部季武の四人である。

本来の四天王は須弥山（しゅみせん）という山の四方で佛法を護持する、持国、増長、広目、多聞の四人

の神様を指す。東の持国天は「国を維持する者」というサンスクリットの漢訳である。南の増長天は「成長する」という動詞に由来し、西の広目天は「大きな目を持つ者」の漢訳である。北の多聞天は「あまねく人の話を聞く人」というサンスクリットの漢訳である。多聞天をサンスクリットではビシャモンのように発音する。そこから毘沙門という音訳の表記も成立した。つまり四天王の多聞天と、七福神の毘沙門天は同じ神様である。四天王の仏像は剣や槍を持った勇猛な武将の姿が多い。



◆人が醸し出す雰囲気や行動の態度を上品や下品と形容する。品がいい、

品が悪いとも表現する。仏教用語としては上品（じょうぼん）や下品（げぼん）と言い、品（ひん）を「ほん」と読む。京都の九品（くほん）寺や東京の九品（くほん）仏もやはり品を「ほん」と読む。

仏教では人間の性質を上中下の三段階に分け、更にそれぞれをまた上中下の三段階に分けた。つまり上の上、上の中、上の下から、最後は下の下まで、合計九通りの品に分類し、九品（くほん）と呼ぶ。上の上の品の人は信心深くて善行の功德を積んで極楽に行き、下の下の品の人は悪行を重ねて地獄に堕ちる。日常語としては極端に簡略化されて、九種類のうち上品と下品の二語だけが使われている。

◆密教系の寺院では願い事を書いた木の札を燃やす「護摩」という儀式を執り行っている。護摩はサンスクリットのゴーマという発音を漢字で

表記した言葉である。ゴーマとは火に投げ入れて燃やすという動作を表すそうである。火は古代から神聖視されて崇拜の対象となっていた。京都の五山の送り火や、鞍馬寺の松明行事や、修験道の火渡りの儀式など、護摩以外にも火を神聖視する儀式が各地に見られる。

◆般若というと、恐ろしい形相をした鬼女の能面を連想する。般若はサンスクリットのパンニヤという言葉の音訳と言われている。パンニヤは悟りに至る真実の知恵と訳されている。般若に続けて使われる波羅蜜多（はらみた）は、やはりサンスクリットのパラミタの音訳と言われている。完全にして最高という意味である。したがってサンスクリットの語源に基づけば般若波羅蜜多は完全にして最高の知恵と訳せる。なぜ般若が鬼女の能面と結びついたのだろうか。

◆閻魔大王は死者の生前に為した善悪の行為を判断する裁判官のような役目を演じる神として一般によく知られている。サンスクリットのヤマのような発音を漢字で閻魔と表記したと言われている。亡者が生前に為した悪行を閻魔大王が書き留めた帳面を閻魔帳という。学生の成績や品行などを記録した教師のノートも昔は俗に閻魔帳と呼んでいた。

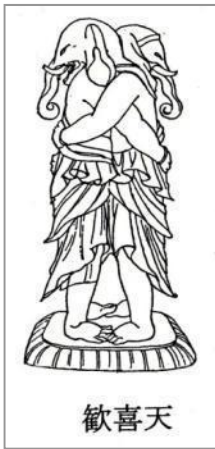


閻魔大王

◆香川県に金比羅と書く神社がある。コンピラは鰐を意味するインドの言

葉で、鰐が神格化されて航海の安全を司るヒンズー教の神様になったと言われている。金比羅もインドの言葉の漢字表記である。

聖天院と呼ばれるお寺が各地にある。ヒンズー教に、顔が象で身体が人間の形をしたガネーシャという神様がいます。仏教に導入されて歓喜天と呼ばれている。実物を見たことはないが、歓喜天は象の顔の男女が抱き合っている双体の仏像だそうである。



歓喜天

東京の柴又に帝釈天というお寺がある。やはりヒンズー教の神様だが、仏教に取り入れられて仏法守護の神

様となった。帝釈天はサンスクリットで神々の最高支配者を意味するシヤクのような発音を「釈」の字で表記し、神々の帝王だから帝の字を冠して帝釈と呼んだと言われている。ヒンズー教から仏教に流入した神々が少なからずいる。



帝釈天

◆「こんにちは」「こんばんは」などと言葉を交わすことを挨拶という。挨拶も仏教用語で、挨拶は押す、拶は迫る動作を表す。禅宗のお寺では師匠と弟子が問答をした。師匠が弟子にこれでもか、これでもかと迫り、弟子の返答如何で悟りの程度を判断した。この問答の過程が挨拶だそう

である。したがって挨拶とは「こんにちは」「いいお天気で」などというのんびりした会話ではなく、出発点は真剣勝負の口頭試問だったようである。

◆依怙最負（えこひいき）という言葉もよく口にする。自分が好意を持つ人に特別に便宜を図る行為である。依怙は人が仏の助けを求め、最負は頼って来た人を仏が慈愛の心で救うという仏教用語だそうである。つまり依怙は人間の行為、最負は仏の行為と解釈できるが、現在はあたかも一語のように「えこひいき」と言っている。

檀那、卒塔婆、舍利、娑婆、毘沙門、護摩、般若、閻魔などの仏教語は、サンスクリットの発音を、漢字を発音記号として利用して音写した表現であり、経や大黒や大日や多聞天はサンスクリットの意味の漢訳であることが判った。私もは無数の

サンスクリット由来の仏教語を、それと気付かず口にしてゐる。今後にも更に仏教関連のネタを集めて続編を綴ってみたいと思つてゐる。

葉山の友人

穂苅 正臣

今年の日本の夏は異常な天候だった。三十五度近くの暑い日が何日も続き、それが終わると、関東や東北各地で、五十年に一度いや九十年に一度と言うような激しい雨が降り、堤防が決壊して水害が発生する、という有様であつた。

そんな雨の止んだ九月中旬の日曜日に、葉山に住む友人宅を訪れた。彼はK大学時代から全日本の代表だった有名なサッカーの選手で、卒業後はM社に勤務し、傍ら、十年以上も企業や全日本サッカーチームの監

督をしてきた。さらにまた、サッカー選手がサッカーに専心出来るような環境や体制の整備をし、ドイツサッカー界とのパイプ役ともなり、日本サッカーの成長を大いに推し進めた。

彼がサッカー界を離れてから三十五年にもなるが、現在はドイツサッカー界の帝王とも言われているフランチ・ベッケンバウアーが名付けた「パツパ・ニーニョ」(お父さんといたずらっ子)という名前のコーヒー専門店を開いている。その彼が日本サッカーの殿堂入りを果たしたことを新聞で知って直ぐに祝電をかけ、翌日の夕方には家内とともに彼の家を訪ずれた。

葉山の高台にあるその家は広い庭を持ち、道路に面した入り口には、日本家屋を改造したセンスの良いお店がある。

そこで自慢のコーヒーを飲ませて

くれた。

一杯のコーヒーにも彼は、自分で挽いたコーヒー豆に湯を注ぎ、よく混ぜて、あくを抜き、長時間を掛ける。情熱を持つて入れてくれたそのコーヒーは大変おいしかった。

二十年近くもヨーロッパに滞在して仕事をしていたので、彼の家の家具や調度品はすべてヨーロッパ調である。二十人もお客を呼んでバーベキューパーティーが出来るとの広さのベランダが家を囲み、そこから葉山の町、さらには太平洋が見える。さらにその先には夕焼けで赤く照らされた美しい富士山が見えた。

夕食に、彼の家から暗い道を歩いて五分ほどで日本家屋を改造したという簡素なイタリー料理店に案内された。イル・レフェージオ(隠れ家)という名前のごとく誰にも知られたくないと言うような人里はなれた場所に、そのお店はあつた。しかし、

お店の中は明るく、お客で賑やかであり、葉山で取れたという新鮮な魚料理もおいしかった。

そこで、食べものついでの話になった。エリザベス女王は一日、五個の鶏卵を食べるという。彼も、若いころから（結婚前から）毎日五個以上食べていると言った。料理の上には鶏卵を必ず乗せるというのである。医者である私は、一週間に鶏卵を七個以上食べると高脂血症の原因になり、身体に良くないと思っていた。

彼は学生時代のように、現在も顔つやが良く、身体はがっちりしている。驚いたのは、今まで大きな病気をしたことがなく、医者にかかって注射を受けたこともないとのこと。薬も飲んだことがないとも言った。さらには一度も健康診断を受けたことがないのだという。海外に駐在していた時も、日本からの来る巡回診療のドクターの検診でも、体童を計

ったり血圧を測ったりするぐらいで済ませたそうである。なんと常識破りな彼である。

ところで、彼の母は九十歳まで元気で一人で自宅に住んでいたとのこと。毎日買い物に出かけ夕食を造り、病氣一つ知らずに元気に過ごし、入院もせずに百三歳で亡くなった。亡くなる三十分前に家族を集め、「体が浮くからみんなで抑えて」と。そして最後に

「みんな仲良くね、さようなら」と言つて亡くなったそうだ。息をひき取った瞬間、十数人の子や孫たちが彼女の寝ているベットを囲み、何ら申し合わせをしたわけでもないのに、みんな「拍手」をした。その夜、赤飯を炊いて母の旅立ちを祝ったという。

彼の母は十九歳で結婚し、夫とロンドンに住んでいた。そのころの父との想い出を子供たちに話し、住ん

でいた所番地までも覚えていた。母の亡くなる直前に、その住所を口にしたが全く正確であった。病気を知らず、ボケも全くなかったのである。そんな彼の母の血統を彼は受け継いでいるのかもしれない。そして、彼は

「自分には介護保険も老人保険もいらない。自分の体調に神経を研ぎ澄まし、母同様に楽しく余生を過ごして、次の世界に旅立つ」とさえ言うのである。

チエホフを読む（9）

咲きおくれた花

（N. I. コロボフに捧ぐ）

藤倉 一郎

1882年チエホフ22歳の医学生
のときの、初期の作品である。友人コ

ロボフに捧げられているが、彼はチェホフの家に寄宿していた同級生で生涯の親友であった。崩れゆく貴族の悲哀と、這い上がってゆく医師のたくましさを感じられるが、最後の医師のやるせない愛情がみられるところは、今までのユーモア小説をこえた好短編である。

プリクロンスキー公爵の長男エゴル・シカは放蕩三昧のため、公爵夫人と妹のマルーシャに説教されている。先代はヨーロッパ各国の大使を務めたし、先代も連隊長としてのその名もとどろいていたというのに、当主の公爵はこわれかけた辻馬車で泥酔して送られてきた。翌朝のたちまちまわっているので医者への往診を頼んだ。医者は危険だというので、トボロコフにもう一度往診を依頼した。彼は若い指折りの優秀な医師で貴族のような生活をしていた。トボロコ

フの父は農奴で侍僕だった。母方の伯父ニキーフォルは今でもエゴル・シカの侍僕をしている。トボロコフ自身も少年のころナイフやフオークや長靴やサモワールを磨かされたものである。診察の結果、ドボロコフは彼女たちに希望を与えた。

その夜マルーシャが熱を出し、翌朝ドボルゴフは二人を診察した。マルーシャは肺炎だった。1週後二人とも全快した。公爵夫人はドクトルに240ルーブリそつと手渡した。診察後紅茶を飲んで雑談をしたが、彼は聡明で知的で学識があり、エゴル・シカの友人とはまったく違っていた。母と兄はドクトルのことを気品が足りないとか、やはり農奴の子供だとかけなしたが、マルーシャは強く引かれるものがあつた。公爵家は貧しくてお金はなくなるし、エゴル・シカの放蕩はつのる一方だった。クリスマス前の、ある日

老婆がやってきて仲人だといって、ドボロコフの写真を渡した。夫人もマルーシャもびつくりした。どうしてドボロコフは自分で来ないで仲人をよこしたのか不思議だった。仲人は「持参金は6万ほしいそうです」と追加した。

マルーシャは私はこの申し出をお受けしようと一晩寝ずに寝返りを打ちながら考えた。その間、仲人は商人の家を回り歩いてドボロコフの写真をばらまいていた。エゴル・シカはマルーシャに「結婚しろよ、彼は教養のある男だからな、そうすれば家も安心だ」といった。マルーシャはその気になってドボロコフを訪ねてこないかと待ちわびていたが、日曜になつても、一月たつても、3月たつても来なかつた。

ある日エゴル・シカが、「ドクトルは商家の娘と結婚した」ときいてきた。いよいよ負債が重なりプリクロ

ンスキー公爵家は屋敷を手放し小さな家に移住せざるをえなくなった。町屋へうつてから、まもなく夫人は絶望のうちに亡くなった。

マルーシヤは秋になつてドクトル・ドボロコフを訪ねた。休診日で不在だった。自宅にはエゴールシカとガール・フレンドのカレーリアがいて、酒を飲んであそんでいた。エゴールシカとカレーリアは相変わらず食事も贅沢だった。マルーシヤは父の年金で暮らしていたが貧しかった。

翌日マルーシヤはドクトル・ドボロコフを訪ね診察を受けた。診察室には大勢の患者が待つていた。マルーシヤは最後に診察を受けた。風邪薬を処方して彼女にわたした。しかし何の話もなかった。

エゴールシカはカレーリアと一緒に住ませたいといつて、マルーシヤがことわつたにもかかわらず、死ん

だ母の部屋に入つてきた。カレーリアはマルーシヤを非難し、当てつけ、薄笑ひして貧しさを哄笑した。

マルーシヤは冬になつてもう一度ドクトル・ドボロコフを訪ねた。診察して聴診し、ラッセルが聞かれた。「サマラへ転地する必要がありますね」と医師はいった。その後言葉を交わすこともなく、マルーシヤは帰つた。自宅ではエルゴシカがカレーリアが出て行つてしまつたと泣き叫んでいた。

マルーシヤは老僕ニキーフォルに5ルーブリ借りてドクトル・ドボロコフをもう一度訪ねた。診察室は今日特に混んでいて、彼女の診察は午後4時になつてしまった。診察を終えて「外気にさらさないようにしてください。もう帰つていいですよ」といわれた。マルーシヤはささやくように「愛してます。先生」と呼んだ。奥から妻が「あなた」と呼んだ

のでドクトルは診察室を出ていった。10分ほどでかれが帰るとマルーシヤは長椅子に横たわつていた。

ドクトルは古い昔を思い出していった。そして「私はお金や上流婦人のためだけに、あの困難な道を歩いてきたのだろうか？」と考えた。

「でも僕がなにをしてあげられますか？」というマルーシヤは「お茶をください」といった。

翌日ドクトルはマルーシヤと一緒に一等車の個室に乗つて南フランスへ旅立った。結局3日とまたずマルーシヤは亡くなった。

ドボロコフはマルーシヤを意識していたのだが、彼女を救うためには何かしなければならぬとまでは考えていなかった。マルーシヤの一方的な恋であつたのだが、彼女の真情を思うとき、南フランスで静養させてあげようと思つたのである。しか

し、病状は進行し死亡するのである。
こんな温かみのある医師になって
くださいという意味で友人に捧げた
小説かもしれない。22歳の作品とし
ては優れている。

『ほんによう』棒掛け

水沢の秋の風物詩

浜名 新

平成27年9月下旬、東都生協の産
地訪問、「生産者との交流会、JA水
沢、協賛・稲刈り」にカミさんと参
加した。

約1か月前、ある夕飯時に、カミ
さんは、

「東都生協主催で、岩手の稲刈り体
験、生産者との交流会に参加します
か」と尋ねた。パンフには、「9月26
日・27日の土・日の1泊2日。新幹
線で水沢江刺を往復。第一日目が、

生産者所有の田んぼで、収穫する稲
の手刈り体験、『ひめかゆ』温泉の宿
で歓迎会と宿泊。翌日、奥州市の観
光・帰還」となっている。

「手刈りによる稲刈り体験とは懐か
しい、『ひめかゆ』温泉で癒されるス
ケジュール。気に入ったよ。土曜の
仕事を休んで参加しようか」

稲の手刈りも懐かしいが、岩手の
内陸部にある『ひめかゆ』温泉にも
一層ひきつけられてしまった。名前
がすばらしいではないか。

「出発日は土曜日なので有休休暇を
取ってくださいね」

「ああ、明日にでも申請しとくよ」

カミさんは最近のスーパーでの買
い物事情に話題を変えた。近所の生
協では、新しい店長がこまめに、2
割引、3割引、4割引の赤札を商品
に貼るようになった。来店のタイミ
ングがずれて、安い値段で買いそこ
ねて、残念な思いをすることもある

そうだ。夫婦2人、独り者の高齢者
の家族が多くなっているため、食材
は沢山要らない。多く料理すれば食
べ残ってしまう。

私はもっぱら聞き役になり、「ああ
そうなのか、それで・・・」と相槌を
打つと、「聞いているの?」と問い詰
められ、うわの空で聞いていること
がばれてしまう。

何年前か前、東都生協主宰の長野県
の某市で1泊2日の高原トマトの朝
摘み体験に参加したことがあった。
農作業用の服装、軍手、タオルを持
参した。作業の前に、日本のトマト
生産・需要、世界のトマト事情と比
較など盛りだくさんの説明・レクチ
ャーを聞いた記憶がある。現地の高
原トマト畑は広大で、参加者が朝摘
みしている高原トマトは、生協の「こ
だわり 高原朝摘みトマト 無塩、
ジュース100%果汁」の原料とし
て、利用されていることがわかった。

私ども消費者が長年愛飲している製品で、安心この上ない。

当日、東京駅に集合し、参加費を支払い、チケットをいただく。盛岡行きの新幹線は8時40分過ぎ発車した。参加者は17名、小学生以上の学童、4人も参加。曇り空で雨が降っている地域もある。何しろ、東京―水沢江刺間は、縦長の相当な距離で、地域により大気圧や雲の分布が異なり、天候は刻々変化する。

水沢江刺で降車し、JA水沢、協賛の中型のバスで生産者の小野寺さん宅に向かう。あいにく小雨で心配がよぎる。

小野寺さんと奥様、実の娘さんとお孫さん2人が心をこめて接待してくれた。軒下には板張りのデッキがこしらえてある。大皿には小ぶりで、真っ白なつやつやした新米のおにぎり、別皿には庭で拾ったという栗おこわのおにぎり、大鍋で炊かれた芋

汁、手作りの蕪(かぶ)の漬物・沢庵・ラッキヨウなど用意されている。

初対面の挨拶が済むと、「さあ、どうぞ召し上がってください」、「遠慮なくいただきます」と早速、おにぎりをパクパクとほおばる。小野寺さんたちと会話が弾む。お孫さんたちも一緒に食べている。

周囲を見ると、若夫婦とお孫さんの新しい家、奥には2棟と農作業用の建物があり、それらを囲むように背の高い、茂った樹木林が見事である。家への通路脇には小ぶりの菜園とコスモスの花が咲き、自宅の通路に接して市道と思われる4メートル道路が建物と平行してどこまでも延びている。

道路に平行した左側には広大な田んぼが広がっている。その田んぼの中に、案山子(かし)の親分みたいな、大きな地藏さんみたいなものが並び、よく見ると稲束が干されて

いた。参加者は見慣れない光景に驚きの印象を抱いた。

「あの地藏さんみたいなものは、東京あたりでは見かけませんね」と誰かが言った。

上下そろいの農作業用の服装に、着替えていたあるじは、

「収穫した稲束を天日干しにする、『ほんによう』です。岩手のこの地方の秋の風物詩ですよ。棒くいを田んぼに打ち込んで、一番下に稲束を支える40cmぐらいの棒2本を十字に固定して、稲束の茎のほうを支える棒の上に置き、稲穂が垂れ下がるように干して、養分が米粒にたまるようにするのです。稲束が落ちないように方角を変えて交互に積み重ねていきます」

「地方によっては、ハザ(稲架)とも呼ぶようですね。僕の田舎の遠州地方では、鉄棒のような感じで、地面に平行に吊るして干していまし

た。大昔、稲作が盛んだった頃、かやぶき屋根の骨格のような、かなりの段を有す高いハザを、何人もの協力で造っていました。小学低学年の頃、遊んで叱られた記憶があります。今、稲作はすっかり廃れてしまいましたけれど・・・」

「天日干しの仕方、地域によりいろいろあるようです」

「天日干しのお米は多少割高でも、美味しいので、消費者に人気があるのですか」

「そのとおりです。自宅で食べるコメもそうしております」

「雨は大丈夫ですか」

「この地方では、この時期あまり降りませんね、3週間ぐらい干して、脱穀・精米します」

「天日干しのお米はブランド米として、高く評価されておりますか」

「もちろんですよ。皆様に、いま、食べていただいているのが、天日干

ししたブランド米の、我が家のコシヒカリです」

「どうりでおいしいわけだ、ナツトク！」

『ほんによう・天日干し』談議に、参加者と生産者との距離が一気に縮まり、ランチタイムが和やかに過ぎていく。参加者たちのお腹は、おもてなしの食事で満たされた。空を見上げると、雲が流れ、青空が現れ始めて幸先がよい。

農協の青年たちも集まってきた。同時に、鋸カマ、軍手、簡易レインコート、作業用の前掛け、長靴などを並べ用意万端、まことに行き届いている。

あるじは稲刈り用のバインダーを用意し、今日のイベント用に刈り残した、収穫する稲4列×25 mくらいの、手刈りと機器で、全て刈り取る予定らしい。

「稲刈りは、順手（じゅんて）で

稲の茎を握り、田んぼから出ている茎の下のを刈り取るように下さい。鋸カマで自分の手を切らないように、鋸カマでの皮膚の傷（きず）はすぐ治りにくいですから。これがそのときの切り傷です。稲を刈った後はカマを田んぼに立てて下さい」と稲刈りの注意点を強調した。

「稲束を束ねる紐は昨年の稲わらを使います、3〜5本くらい掌を上にして親指と人差し指の間に茎のほうを上に入れて、稲わらの上に刈り取った稲、2握りぐらいを稲わらの上に置き、稲わらを交差してふたひねり、みひねり、茎のほうを、巻いた稲わらに押し込みます。昔から行われた束ねる仕方、ほどけませんのでご安心ください」

「稲わらの両端で結ばなくていいですね。いつか、映像で洋服などのボタンをつけるとき、糸を結ばないで留めた糸の間にしまいこむ方法

を紹介しておりました」

「順手とは親指を上にして、握りこぶしを作る要領です。逆手（さかて）は鉄棒で逆上がりしたとき握る仕方ですが、稲刈りでは怪我をする割合が多く、順手が原則です」

子供も大人も中腰で、順手で稲束を握り、茎の下部分を鋸力マでサクツと、小気味よく刈り取っていく。鋸力マがよく切れる。逆に束ねるのが慣れないのでうまくいかない。あるじは参加者の間を観察して回り、手助けし、注意し、うまくいくと相手をほめまくる。長いこと自動車の教習所の教師をしていたそうで、教え上手、ほめ上手である。

農協の職員は棒くいを田んぼに試しうちを繰り返す、最期に下腹に力をこめて深く打ち込んでいく。稲束が落ちないように十字に短い棒を、棒くいに括り付け、稲束の置き場所を作っている。参加者は稲束を完成

させると『ほんによう』の支えの棒に稲束の茎の端を上、穂が下になるように置いていく。次は稲束の茎が重ならないように、方角をかえて積み重ねていく。各自4回ぐらい稲を刈り、稲束を作り終えた。

頃合いをみて、あるじは稲刈り機（バインダー）を操作して、稲を刈りはじめた。この機器には専用の麻ひもの束が取り付けられ、刈り取った稲を麻紐で自動的に束ね、ポイツと外に放り出してくれる優れものだ。女子の小学生が興味を示し近寄ると、あるじは学童に、稲刈り機の操作を体験させた。学童は機器のハンドルをもち、稲の列をはみださないように、稲刈り機を慎重に操作して、稲の収穫体験をし、満足したようだ。将来農業に興味を抱くかもしれないではないか。

稲刈りが終わると、めざとい人たちが高い樹林の脇で、落果した『いが

栗』を見つけ、足や鋸力マで、つやのある茶色の栗を取り出していった。「栗拾いですよ」と田んぼにいた参加者に呼びかけてくれた。皆さん熱心に栗拾いに興じた。栗は熟すると自然落果する。

お別れのときを迎えた。小野寺さんの奥さんは、自家用に備蓄していた栗やんにくを持ち出してきて、にこにこして希望者にお土産として差し出してくれた。参加者は申し訳ない気分であつた。小野寺さん一家、農協の人たちに、感謝してお別れした。

次に立ち寄ったのはピーマン農家のT氏宅であつた。あるじはピーマン畑に参加者を案内し、説明しながら、「たくさん採ってお土産にどうぞ」と豪快に言ってくれた。参加者は遠慮なく、緑色、あるいは赤色のピーマンをたくさん採って満足したようだ。花梨（かりん）の木に実がなつ

ている。あるじはビンに入った『かりん酒』を持ち出して、『どうぞ呑んで下さい』と誘ったが、誰も呑まないで誰かに手渡した。

午後4時過ぎ、今夜の宿、『ひめかゆ』に到着した。パンフには、焼石岳温泉 焼石クアパーク 『ひめかゆ』とあった。1家族1部屋で、大変ありがたい。お茶菓子と茶を喫し一休み。宿でもてなしの茶菓とお茶が用意されたのは江戸時代で、歩き疲れた旅人を癒すためだったとか。この風習が現代に続いているのは大変好ましく、外人にも喜ばれるに違いない。

温泉は薄緑色で、なめるとしよっぱく、多少ぬるぬるする、ナトリウム塩化物泉で、泉温は70度強で、皮膚病など適応症も多い。素晴らしい湯であった。

歓迎会は大広間で行われた。生産者の小野寺氏、T氏も参加され、J

A水沢所属の幹部のご挨拶のあと、生協会員暦の長いSさんが生産者と生協の活動を感謝し、乾杯の音頭。皆さん唱和！ 地元芸人による岩手民謡と踊りが披露され、次いで自己紹介と稲刈りの感想など、ご馳走とお酒で宴たけなわとなった。

翌日、9時半過ぎ出発、宿に近い奥州湖交流館で所長さんの説明を受けた。胆沢（いざわ）川とその下流の扇状地の形成、清水下遺跡・前方後円古墳・角塚古墳が存在。

昭和21年に石沢ダム建設・昭和28年ロックヒルダムの完成、その後洪水調整・灌漑用水・水道用水・発電・正常流量を目指し、昭和58年起工した胆沢ダムが平成25年竣工し26年管理移行されたことなど、盛り沢山の解説があった。

稲作には水の供給が必須で、扇状地の農家の間で水戦争が起き、昭和38年茂井羅堰と寿庵堰に、水を均等

の配分させる巨大な田筒分水工が設置されたそう。胆沢ダムの堰堤の散歩と巨大な分水工（時差で分水する）を見学した。

水沢物産センター、道の駅来夢館で昼食、花の栽培農家を訪問、高さ20メートルの物見櫓から、田んぼアート（何種類かの稲の品種別に植えてアートに仕上げる）の見学。車中でお土産あてクイズがにぎやかに行われた。

ご当地、奥州市の観光マップには、岩谷堂たんすゾーン・南部鉄器ゾーン・前沢牛ゾーンと、歴史上の人物（高野長英・後藤新平・斉藤實・菊田一夫の記念館）、藤原清衡公生誕の地に藤原の郷、平泉町には中尊寺・毛越寺などの観光・歴史遺産が数多く記載されている事実を知った。

（平成27年11月）

龍の背の理想郷

出来 尚史

そもその発端は「りゅう座」を見たことにある。「りゅう座」は北の空に掛る星座だ。大きい星座だがあまり目立たない。一番明るい星で二等星。これが一つだけで、あとは三等星、四等星……。どの星をどう辿っていけば「りゅう」の形になるのか、長い間私にはわからなかった。初めて成功したのは小学五年生の夏だ。そして、それを機に同じような夢を二度三度と繰り返し見るようになる。龍の登場する不思議な夢——それからその話をしようと思う。

夏休みに入ったばかりの夜、私は庭にいて星空を眺めていた。夕涼みというには少し遅い時間であった。虫の音も聞こえず、あたりは静寂に

包まれていた。星々は天にあつてその輝きを競い合っている。地上に注ぐは夏特有の濃密な光の雫だ。特別の理由があるわけではない。しかしその宵ばかりはいつもとは違うような気がした。魔法の世界にでも入り込んだような感じ、とでもいうのだろうか。

右手、天の川の中にカシオペア王妃が座っている。左手に対座するのは大熊の偉大な尾、北斗七星だ。真ん中には可愛い小熊の姿がある。そして——あつ、「りゅう」だ。「りゅう」がいる！ 私は興奮した。それまでその形を一度も捉えられなかった「りゅう」。それが夜空にくつきりと浮き出ていたのだ。

大きい！ と思った。「りゅう」の頭は天頂近く、ヘラクレスの足元にあった。長い頸を北へと伸ばし、そこから百八十度転進して胴だ。その後にはもう一度大きく曲がり、これま

た長い尻尾を小熊と北斗の間に収めている。天空に逆S字を描く堂々たる星座だった。

「りゅう座」の「りゅう」はもちろん西洋の竜のこと。ギリシャ神話では、黄金の林檎を守る竜として登場する。しかしこの夜、私の頭に浮かんだのは日本の「龍」であった。日本の、と言って語弊があれば、東洋の龍。二本の角と長い髭を生やし、四本の肢を持つ龍。雲を呼び、稲妻を走らせながら天高く翔る、あの龍である。

「りゅう座」の主脈、逆S字の周りに目を凝らせば、小さな星が角や四肢を形作っているのがわかる。素晴らしく均整のとれた姿ではないか。これが東洋の龍でなくてなんだろうか。星として天に鎮座するくらいだから偉大な龍に違いない。もしかしたら龍の王？ そうだ、東洋の龍王が星になったんだ！ 新発見でもし

たかのように私の心は弾んだ。

飽かず眺めていると、不思議なことが起こった。星が龍の形を保ったまま天空から剥がれたのだ。落ちたのではない。自然に、すっと離れた、という印象だった。

フワリ——宙に浮いた龍は、ゆくりと体を伸ばした。驚いたことに星でできたこの龍は動く。伸ばした体を曲げ、また伸ばした。少しづつ大きくなっている。きつとこちらに向かっているのだろう。さつきまでの骨組みだけだったはずなのに、いつの間にか実体の備わった立派な龍になっていた。遠く離れていても優雅さ、気高さが伝わってくる。さすがは王者だ。

日頃絵で見る龍は荒ぶる神であった。だがこの龍は違っていた。厳かな中にも優しさが感じられる。これは僕の龍だ、僕だけの龍だ——私は密かにそう思った。今日は地球巡視

の日かもしれない。近くまで来たら絶対ご挨拶をせねば——。

満天の星空を背景に、龍の王はゆるりゆると降りてくる。地球の少年の決心などまるで知らぬげに。

「遅いから家に入りなさい」

親の呼ぶ声で我に返った。同時に龍の姿が消えた。「りゅう座」は再び天に掛る。私は幻を見ていたのだろうか。

その夜、夢を見た。冒頭に記した「龍の夢」シリーズの第一回目である。

夢の中の私は軒端に立っていた。昼なのか、夜なのかはわからない。

目の前に途轍もなく大きい物がいる。「いる」と言ったのは、それが動いていたからだ。地上五mくらいの高さに浮いたまま、右から左へと緩やかに移動していく。機械というよりは生物の動きのように見えた。

下の面は暗くて見通しが悪い。随

分と奥行きがありそうだ。上はどうかと思って仰いでみた。はるか上方に一片の空。あの辺がこの物の上面の境界か。横方向には切れ目がなくどこまでも続いている。いったいこの物の正体は？

あつ、龍だ、と私は夢の中で叫んだ。頭も尻尾も見えないがこれは龍だ。天から地球に向かって降りてきた龍、あの龍が夢に出てきたのだ。

やつと着いたんだね、お疲れ様。そつと声をかけてみる。無論返事はない。龍の頭はずつと先の方。私の声など聞こえるはずもなかった。

夢で見る龍は白っぽい色をしていた。私は時々色付きの夢を見るが、その日の夢は白黒のままだった。白あるいは薄い灰色の胴体には鱗らしき物が見て取れる。一枚一枚が百mはあるうかという代物だ。鱗一枚でこの大きさ、全体は推して知るべし。数km？ いやいやそれではきくまい。

龍はその大きさを自在に変え得る

という。となれば、今見る姿よりもさらに大きくなれるということか。

地球規模の巡回にはそれらも必要かもしれない。しかし、巨大化すればするほど人間との繋がりが希薄になっていくような気がする。心配だ。離れることなく私たちのことを見守っていてほしい、とその時真剣に思った。

音もなく悠然と龍は行く。今私が見ているのは多分、龍の胴。前足はもう過ぎてしまったということだ。

このまま待つていけば後足が見られるかもしれない。そして尻尾も。しかしどれだけ待てばいいのだろうか。眼前の光景はいつまでも同じままである。私は小さなあくびをした。

その後のことは憶えていない。とにかく夢はそこまだった。朝が来て時間切れになったのかもしれない。夢はなにぶん遠い昔の話だ。夢は記憶の底にしまいこまれ、長い間思

い出すことはなかった。

三十歳になった時、私は二度目の夢を見た。登場したのは子供の頃見た、あの龍である。記憶が一気に蘇った。夢の中で昔の夢を呼び起こすとは――私の夢は入れ子構造か。

今回の夢も眼前の胴体から始まった。龍は色も大きさも変わらないように見える。変わったのは私の方である。夢を見ている「眼」、あるいは「脳」としての私は、地上に縛られることなく空間を自由に移動できた。私は上へ上へと昇って行った。わずかに覗いている空を目指す。夢だから時間はさほどかからない。あつという間に龍の背中が見えるところに出た。広大だ。見渡す限り特徴のない平面が続いている。

「眼」はさらに高く飛んだ。昇るにつれて胴体の丸みがわかるようになる。背中中央を走るギザギザの

突起も見えてきた。前方遙か彼方に見え隠れしているのは龍の角かもしれない。もう少し上がって全体を視野に、と思ったが、それ以上は無理だった。私の「眼」もその辺りが限界らしい。

戻る途中で気が付いた。龍の背中のあちこちに起伏がある。つい先程までのつぺりした面だとばかり思っていた。近づくにつれ丘や窪地が明らかになってくる。なおもズームインすると木々や水の流れも見える。広い草原も現れた。地上の景色と見まがうばかりだ。「これは夢、これは夢」、夢の中の私が自分自身に念を押している。

新しい世界は、その大部分が自然そのまま、といった感じだった。龍の背中に開けた世界だから、まさに字義通りのバックカントリー。私は山を駆け、谷を走り、水面を掠めて行く。爽やかな風とやわらかい陽光

が道連れだ。なんといつても夢の中。風景は瞬時に入れ替わり、飽きることはない。

湖を越えたところで思いがけず人に出くわした。田畑があり、馬や牛が草を食んでいる。人々は額に汗して農作業の最中だ。東洋系の顔だが日本人のようではない。近くの家を覗いてみた。庭で子供たちが遊んでいる。元氣あふれる笑顔がまぶしい。

いつの間にか場面は変わり、私は街の中にいた。街と言ってもさほど大きくはない。ここは皆が集う所。そして交易の場所。そぞろ歩く人々。荷車を引く馬車も通る。街角で談笑する女性たちの姿がある。誰も急いでいない。馬でさえ屈託のない様だ。広小路には市が立っていた。作物、衣類、雑貨……どれも手作りの温かい品物ばかり。おや、あちらの方からおいしそうな匂いがする。

——と、ここで夢はおしまい。い

つものことだ。大事なところで夢は終わってしまう。

次の日の夜、床に就きながら考えた。子供の時に見た夢と今回の夢について。

最初の夢はどうか理解の範囲内だ。私は小さい頃から龍が大好きだった。数ある幻獣の中でも常に第一位。龍の絵を見、描き、龍の出て来る本をたくさん読んだ。一方で大きい物への憧れもあった。天を覆い尽くすほど巨大な龍。そのイメージはいつも頭の中に存在した。そこへもつてあの日の出来事——天から幻の「りゅう」が降りてきた——が重なる。あの夜の夢は正にしかるべくして訪れたという気がするのだ。

今回の夢はそれほど単純ではないし、謎も残る。二十年もの時を隔てて同じ龍の夢を見た。このこと自体尋常とは思えない。子供の時とそっくりそのままの龍だなんて、私の知

能が少しも発達していないことの証ではないか。

しかもその龍の背中に、私はもう一つ別の世界を造ってしまった。いったい何を考えていたのだろう。いや考えるというより意識下の問題か。それでも山や川を呼び入れるだけならまだよかった。そこに人を住ませる。龍の背に人里？いやこれはいかにも大胆な設定だ。それにしてもと半ば呆れながら考える。あの人たちは何処からやって来たのか、と。

思いついたのは中国の物語だ。桃源郷。私の夢に桃の花は出て来ない。しかし、村の情景には似通ったところがあった。もしかしたら夢のモデルはその物語なのかもしれない。はるか昔に読んだ話。それが私の頭の中に刷り込まれており、夢の一部として転写された、そう考えても不思議ではない。ならば——と私は勝手に解釈を進めていく。

物語では村人の先祖は戦乱を避けて彼の地に住み着いたことになっていた。私が夢で出会ったのも地上の難儀を逃れて来た人たちだったのか。あるいはその末裔？

龍の背に至る道筋は不明だ。集落は最初シェルターとして始まり、時を経て街を形成するまでに発展したのだろう。人々の穏やかな顔つきから、今は愁いの無い平和な世界にしていることが窺える。災厄に打ち拉がれ地上を追われた民。彼らは龍の背に安住の地を見出したのだ。

強く念じれば夢の続きが見られる、そう信じて布団に入った。けれどもその夜は見事な空振りだった。龍の背の町や村は今後どうなっていくのだろう。あれが理想郷というものならば、その行く末を確かめたかった。

それから二十年後、私は再び龍を見た。三度目の夢である。私は五十

歳になっていた。身边は多忙を極め、明日のことはおろか今日の見通しも立たない、そんな日々であった。世界のそこかしこで不穏な空気が流れているようだったが、目を向ける心の余裕もなかった。

これまでと同様、龍は唐突に出現した。気付いたら眼前にいた、という感じだ。相変わらず巨大だ。空間のすべてを塞いでしまいそうな勢いでゆつくりと進んで行く。ズームイン、ズームアウトのできる私の「眼」も健在である。さっそく「眼」に乗り込み、高い位置まで昇ってみた。その日の龍の背は格別大きな起伏もなく、全体として平らかな印象を与えた。そして歓迎すべきことに、色が付いていた。総天然色ではないが、部分的に彩色されている。

向こうの方にオレンジ色の屋根が見えた。尖った塔は鐘楼か。瞬く間に白い壁の瀟洒な家や石畳が近づい

た。噴水の周りで子供たちがはしゃぎ回っている。乳母車を押す母親たちの姿も見える。カフェのテラスからは賑やかな話し声。窓には綺麗な花が飾られ、楽器を弾く女の子の顔がのぞいている。ヨーロッパの街をそのまま移したかのような光景だ。時代も場所も不明だが――。

不意に場面が切り替わった。華やかなパレードが目飛び込んでくる。足並みを揃えて楽隊が進む。きらびやかな衣装を着けた踊り子たち。山車の上でフェスティバルの女王が手を振っている。紙吹雪が無い、テープが頭上を飛び交う。衣装や肌の色からすると南米の謝肉祭に近い。本家本元のような喧騒や狂乱はないが、人々の興奮、熱気は本物だ。

景色は一変した。眼下に緑の牧草地が広がっている。丸めたティッシュのように見えるのは羊の群れだ。こちらの視線に気付き、慌てて走り

始めた。逃げる様がなんとも可愛い。羊の姿に見とれていると何時の間にかブドウ畑に出た。収穫の時期だろうか、大勢の人たちが忙しそうに働いている。今年も美味しいワインができますように。

チューリップと風車の組み合わせはいかにもオランダ風。民族衣装を着けた若者たちが集まっていた。赤、黄、紫の花畑には彼らの笑顔がよく映える。今日は運河のピクニック？

あれあれ、ゴンドラが出てきた。同じ運河でもこちらはヴェニスだ。なんとも目まぐるしい。漕ぎ手の歌声に聞き惚れる暇もあらばこそ、舞台はまた移動。今度は港町にやってきた。逞しい男たちが荷物を運んでいる。船の大きさからいって遠洋航海だろうか。陽気な掛け声があたりを響く。

その後も私はいろいろな街を訪れた。前回の夢に出てきたのは東洋人

風の集落が一つだけ。今日の夢はどうしてこんなに多彩なのだろう。次々と移り変わるシーンに私は驚きを禁じ得なかった。

黒い肌の子供たちが住む村にも行った。大きな魚を釣り上げた男の子は真つ白な歯を見せ、全身で喜びを表していた。ゲルの傍らで乗馬の練習をしている少年たちにも出会った。もちろん日本人にも――全員が着物姿なのには苦笑した。

イヌイットはアザラシ猟の真つ最中。オアシスの木陰では隊商が休んでいた。ターバンの下にのぞく彼らの瞳は、思っていたよりもはるかに優しかった。

夢というわずかの時間にずいぶん沢山の場所を回ったものだ。龍の背の広さにも限りがなかった。あれだけ多様な民族を一堂に受け入れ、いささかも動じるところがない。夢に出てきた人たちは大人も子供も明る

く活き活きとしていた。誰もが心から生を享受しているように感じられた。時代背景がばらばらだったせいでよくはわからないが、皆が皆、苦難多い故郷を捨てて移ってきた人ばかりとは思えなかった。

もしかして私は、龍が一から造り上げた世界を見ているのだろうか。地上とは似て非なる別天地。地上にあつては実現し得ない平和で豊かな世界を、龍が創造したというのか？皮肉な見方をすれば、それは一種の実験社会だ。しかし、何のために？「地上世界に範を垂れるため」などと安易なことは言うまい。私には龍の世界の大部分が未だプリミティヴな状態と思われた。各民族がそれぞれの文化を成熟させつつある段階。国と言う概念すら生まれていないようにも見えた。

人口増加と資源のバランスはうまく取れていくのか、民族間の交流が

深まれば何が起きるのか、相携えて困難に立ち向かうことができるか？

いや待て。地球の尺度で推し量るのは止めにしよう。ここは龍の世界だ。全く新しい人類の歴史が始まるうとしているのかもしれない。地上に住む私たちがこれまで一度も到達できなかった理想の社会。人間という不完全な存在が、龍の力を借りてそれを実現できるしとたら、そんな喜ばしいことはない。たとえそれが地上から離れた別の場所であっても

時は移り——現在。

龍の再訪を私は待っている。今のところ待ちぼうげだ。姿を見ないと心配になってくる。過去に三度、ほぼ二十年おきに龍の夢を見た。間違はなく四度目がやってくる頃合いなのに。

龍の背の住民はどうなったのだろう。「理想の共同体と思われたが意外

に脆かった。新世界は瓦解したのだ」私の中で悲観的な声が囁く。もしそうだとしたら人間の愚かさのせいだ。龍からもらった人類再興のチャンスを生かすことができなかった。

「それは違う」と別の声が言う。

「龍が来ないのは全く他の理由からだ。あの実験は成功したんだよ。龍はいとも簡単に楽園を造ってしまった。人間には到底理解できない方式でね。もちろん人間自身も変わる必要があった。感情の無いロボット社会のことを言っているのではない。

むしろ逆。感動や喜びがより大きく、悲しみや苦悩がより少ない、愛と慈しみに満ちた世界だ。人間でもやれる。それを確認した後、龍はその人たちを乗せたまま地球を去った」

信じられない話だ、と私は呟いた。だが信じたような気もする。「新世界の創造は失敗に終わった」説よりもはるかに心地好い。しばしの葛藤

の後、私の中で楽観論に軍配が上がった。

龍はきつと戻って来る。新たに準備を整えて。今度来た時は地上から直接人を引き入れることになるだろう。龍の背はこれまで以上に大規模な楽園造りの場となるに違いない。今再び魔法の力が働いて、人々が動き出す。歴史が新しく始まる。その場面をこの目で見てみたいと願う。

戯けたことを、と笑わば笑え。所詮はこれ、夢の話だから——。

五月も終わろうとする頃、桁外れに大きな雲を見た。その日の私はビルの十階にいた。あれは積雲だと思う。無数の積雲が次々と横に繋がって長いひとつの雲を形成している。延々と続き、両端は全く見えない。私が今いる場所から見通せないということは、おそらく数kmに亘っているのだろう。いやもつとか。高さは

1km弱、幅もほぼ同じサイズ。なんのことはない。白い巨大なチューブが空に浮かんでいる様だ。表面が通常の雲のようにモコモコしていないので余計にそう見える。チューブと異なるところは中空ではないということだ。私はこれまでこんな奇妙な雲にはお目にかかったことがなかった。

そこで思い当たった。夢の中の龍あれが現実の世界に現れたら、この雲のような形を取るかもしれない。今見渡しても頭や足は見えない。しかし夢でもそうではなかったか。私はあの時、龍の背ばかりを見ていた。龍の背の新しい世界、安寧の地に住む人々の笑顔ばかりを。

雲はわずかにカーブを描きながら南から北へと移動していく。あまりに緩やかな動きなのでそれとは気付かぬほどだ。上面は陽を浴びて燃えるように白く輝いている。そこには

人の姿は見えない。それでもなにか大切なことが起きつつあるような、そんな気配が感じられる。

「乗ってみたら」と雲が誘う。

窓を開けて一歩踏み出す。

一瞬、ほんの一瞬だけ、私はそうしたいと思った。

小平市医師会研修旅行

白矢 勝一

朝九時頃バスに乗って谷根千散歩にでかける。谷根千（やねせん）とは、東京都文京区から台東区一带の谷中（やなか）・根津（ねづ）・千駄木（せんだぎ）周辺地区のことで、

東京の下町風情が残るエリアである。

小平医師会研修旅行は日本の医学の歴史を探索することで広く知られている。道行く人々のはかの格調高き人々はいかなる団体であろうと振り

返り、その雄々しき姿に感銘を受けたことであろう。とにもかくにも小平医師会研修旅行はちよいと一味違った趣のあるものである。

さてここに旅の記憶を留めおくよう仰せつかったが、この研修旅行を記すに至り幾分客観性を欠くことになったがお許しいただきたい。

バスは東大農学部正門に着いた。

この正門には東大紛争時代、農学部自治会委員長、副委員長立候補者として私の名前が大きく張り出されていた。この学内でアジテートしたりデモをやったり…本気で日本を変えつつもりでいたのである。東大医学部の封建的な医局制度への抗議から端を発した紛争は教養学部、文学部へと若き、情熱あふれるところへと波及し全国に広がっていった。最近ようやく学生たちがかわいいたデモをするようになってきた。浅薄で情緒に流されてはいるが若いということ

はいいことである。行動が頭より先に出るという行為は東大紛争以後当局によって筑波法がつくられ皆無となっていた。霞が関は毎年のように法律をつくり自分たちの都合のいいように国民の行動を制限してきた。しかしようやく今回の安保法案で感情的に動く学生がでてきた。よく考えず損得なしで行動する若者がでてきてこそ日本は元気になる。「イギリス人は歩きながら考える。フランス人は考えた後で走り出す。スペイン人は走ってしまった後で考える」最近の日本人は歩いてはいるが他人の眼を気にしすぎいつも考えすぎているのではないかと思う。今回の若者のデモはスペイン的だ。日本はアメリカの属国なのである。それを肝に銘じておくべきである。原爆を落とされ、空襲で爆弾を落とされ、軍事基地を置かれても一切文句が言えない。経済的にも軍事的にも属国であ

るから従うしかない。安倍首相が支持率が下がっても法案を通した理由はアメリカのいうことを聞くしかないということだ。

なにはともあれ当時はよく損得を考えず無茶をやったものである。学舎に立てこもった当時の紛争時代を思い出しながら、構内へ。

我々の時代は渋谷のハチ公前、六本木のアマンドなどが待ち合わせ場所として名をはせていた。ところが最近農学部校内に忠犬ハチ公の像がつくられ観光名所となったようだ。

しかし私にとつてはやはり奥にある校舎の最上階が一番懐かしく思えた。当時そこに泊まり込み、夜遅くまで友人たちと議論していたものだ。紛争時代を思えば平和で静か、退学にもなった学生がいたのが夢みたいなものに思える。

農学部正門を後にして根津方面に歩いてゆく。東京聖テモテ教会のそ



東大農学部校内のハチ公像

ばを通る。この教会は歴史のある建物だったそうだが、戦争で焼け現在の建物になっている。東大の周りにはキリスト教会が多いそうだ。その理由は頭のいい人材をキリスト教徒にしたいとの考えがあったとのこと。坂を下りて根津神社に向かう。この谷根千には100以上の坂があるそ

うだ。坂にもいろいろな形や歴史があつて名前がついているとのこと。

そういえば学生時代向ヶ丘寮から夜よくお化け階段を通つて仲間たちとそぞろ歩きをしたものだ。当時お化け階段の下り口に高い塀があつた。

そこに地面から2メートル達する黄ばんだ幾条かのシミが認められた。

その幾何学的文様は日々変化し、地域の名物となつていた。道行く人々は、これは如何なる意味があるのだろうかと首をかしげたものである。

現在はこの階段は下りるときと登るとき階段の数が違うということでお化け階段と名づけられたということになつてゐる。しかし当時の奇怪なこの文様がこの名称を与えたと言つても過言ではないと思う。つまりこの階段の歴史的名称は我々向ヶ丘寮生の日頃の行いのタマモノである。

当時寮生は誰彼となく飲み屋を求めて上野方面に出かけたりお化け階

段へと向かつたりした。

そのうちの何人かが戦に出向く前に出すものは出しておこうと、一斉に壁に向けて放出するのである。誰が一番高く飛ばせるか？剣道部のT君はなんといつも頭

上超えをやり、常に他を寄せ付けずトップであつた。そのT君はその後腎臓を患つたということである。諸氏、飛ばしすぎには注意すべし！である。

我々が卒業したのち、その壁は取り壊され階段も今はきれいに舗装されている。今では語るものもいなくなつたお化け階段の由来をここに記すことができ日本の歴史に残せたこと、のちに記す渡辺淳一の小説ほどではないが隠れた真実を後世に伝えることができたことを誇りに思う。

根津神社に来る。根津神社は私が



根津神社の千本鳥居

寮生であつた頃とほとんどかわつていない。ツツジの頃はとても素晴らしい。乙女稲荷は最近外人にも人気があるとのこと。学生時代は女性とともに夜の風情を楽しんだ輩も多かったように思う。坂道を上り日本医科大学に向かう。そこを通りながら医学の歴史にちよいと触れさせていだいた。長谷川康による済生学舎は3年で卒業することになっており、ここを出て医師開業試験を通るものが多かったそうである。その人たちの中で有名なのが野口英世、荻野吟子、吉岡彌生である。野口英世や吉

岡彌生は語るに及ばずであるが、荻野吟子については一言述べておきたい。渡辺淳一の『花埋み』という小説を読んだのはいつのころだったろうか。渡辺淳一は不倫の中に本当の愛があると公言し『失樂園』などに有名である。恋を妨げる大きな壁があつてこそ犬も食わない愛でも燃え上がる。さもありません、さもありません。

それはさておき、この作品が一つあるだけで彼の評価は大きく変わってしまうだろう。彼が大学病院医局の当直室を掃除させられたとき「北海道医報」という、道医師会を出している小冊子を偶然見つけたのである。その中に「日本で最初の女医来道す」という見出しで、荻野吟子のこと書かれていた。それが荻野吟子を知るきっかけであつたそうだ。こういうことがなければ荻野吟子は永遠に歴史の闇に埋もれていたかも

しれない。

十代で結婚、夫に性病（淋病）をうつされ約2年で離婚。東大大学院に入院するが、担当医はすべて男性であり、とても恥ずかしい思いをする、このつらい経験から「女医が必要である」と考え医師になることを決意するが、ここからが大変だ。

学校では男子生徒にトイレのドアをドンドン叩かれたりする嫌がらせの連続。優秀な成績であつたにも関わらず医師国家試験が受けられなかった。しかし多くの人の助けと彼女の熱意が実り、ようやく受験が認められ1884年と1885年に前期後期にわかれて行われた医術開業試験で、悲願の合格、こうして日本に女医第一号が誕生した。このとき35歳。女医になることを決心してから十数年が経過していた。

彼女の人生は波乱に満ちたものであつた。再婚し北海道へ。渡辺淳一

は彼女の生涯の最後の最後まで書いている。この一冊は日本の医学の歴史にとつても重要なものであろう。

済生学舎の廃校後、関係者が在校生の救済のため創設したのが、後の日本医科大学に発展する日本医学校だそう。私が学生のころ東大向ヶ丘寮と日本医科大学とは近かつたのでよく雀荘で会つたものだ。当時を思い出しながら解剖坂を通る。えらい急な坂である。昔はホルマリンのおいがしたそう。

次に夏目漱石旧居跡を見る。

夏目漱石は、イギリスから帰国後の明治36年から3年間ここに住んだ。この間、東京大学英文科・第一高等学校の講師として活躍する一方、処女作『我輩は猫である』を執筆し、この旧居は作品の舞台となつた。『倫敦塔』『坊ちゃん』『草枕』等を次々に発表する。

なお、家屋は愛知県大山市にある

「明治村」に移築され公開されているとのこと。私が彼の作品に親しんだのは18歳ころである。高校の先生が漱石の由来を説明してくれ、またその各々の小説について黒板に書いて説明してくれたのを覚えてい

る。「吾輩は猫である」「坊ちゃん」など痛快な作品から「道草」「草枕」など則天去私に至る漱石の心境を黒板に書いて説明してくれた。東京教育大学出の国語の先生は田舎育ちの我々にはとても新鮮に見えた。

漱石の由来は、中国西晋（せいしん）の孫楚（そんそ）は「石に枕し流れにちち漱（すす）ぐ」と言うべきところを、「石に漱ぎ流れに枕す」と言ってしまう、誤りを指摘されると、「石に漱ぐのは歯を磨くため、流れに枕するのは耳を洗うためだ」と言つてごまかした故事からだそうである。つまり自分の失敗を認めず、屁理屈（へりくつ）を並べて言い逃

れをすることだそう。

千駄木ふれあいの森を通つて、森鴎外記念会に到達。即興詩人や舞姫などなつかしい古本が展示されている。

漱石、鴎外、芥川などは高校生のころ大半読んでしまい、その後読んだことはない。しかし、今でもその内容を思い出せるのは歌謡曲と一緒に若いころ覚えたものはなかなか忘れないためだろう。「石炭をば早や積み果てつ。」ではじまるこの小説を何度高校生のころ読み返したことだろう。内容だけでなく文章が美しい、今思えば鴎外の実体験、結ばれない恋をそのままありていに書いた心情が心を打ったからであろう。

舞姫にでてくるエリスが鴎外に会いにドイツから来たという話を半信半疑で高校のころ授業で聞いた覚えがある。ところがどうも本当の話だったようだ。インターネットで下記

のような記事を見つけた。

鴎外「舞姫」エリス特定？ 教会の出生記録に名前、「別れ」後の職業も合致 独在住ライターが確認

モデルと判断した根拠として▽来日時の乗船者名簿にある「エリーゼ・ヴィーゲルト」と名前が合致 帰国後に帽子製作者として働いているのが、鴎外の妹の回想と一致 出生地のシュチェチンが「舞姫」の中にも登場

来日時に21歳という年齢も妥当などが挙げられている。また、鴎外の娘の茉莉（まり）と舌奴（あんぬ）は、エリーゼのフルネームと、その妹（アンナ）から命名した可能性を指摘している。

ドイツ在住22年の六草さんは語学力や土地勘を生かし、2009年6月から半年間の現地調査でエリーゼの出生記録にたどり着いた。

「舞姫」発表から120年の昨年

には、テレビディレクターの今野勉さんが鴎外の遺品にあった刺繍（ししゅう）用型板のイニシャルを分析し「15歳ルイーゼ説」を唱える著書を刊行。新説登場でモデル論争がまた熱を帯びそうだ。

即興詩人を読んだのは中学生のころである。この小説はアンゼルセンの小説を鴎外が美しい古文調で翻訳したものだ。何度も読み返し涙したのを覚えている。

ローマのベルベリーニ広場、トリトーンの噴水の雑踏の場面からこの物語は始まりまる。

イタリアにあこがれたアンゼルセンはこの国の各地を小説の中にちりばめている。アントニオとアヌンチャタの悲しい恋の物語。アヌンチャタの手紙の部分を何度も読み返し感涙。さて昔読んだ恋愛小説で今も覚えているのはと考えると「リンゴの樹」「緑の館」。すべて悲しい結

末である。近松心中物語でもわかるように結ばれない恋ほど涙誘うものはない。

余談が多くなったが、この鴎外記念館に続く団子坂がこの旅最後の散歩コースとなった。団子坂は。漱石の『猫三三四郎』。森鴎外の『青年』、二葉亭四迷の『浮雲』江戸川乱歩の『D坂殺人事件』にも登場。どれもこれも若いころ読まれた方が多いと思われる。

正岡子規も『自雷也もがまも枯れたり団子坂』と団子坂の菊人形の様子を詠んでいる。

我々小平医師会の猛者たちはこの険しい坂道コースを終え浅草に向けてバスに乗った。

バス中から浅草の間屋街が見える。包丁屋さんと金物屋さん、瀬戸物屋さんなど歩いたら面白そうなお店が並んでいる。



今半のすき焼き

浅草今半に到着。ここのすき焼きはうまい。江戸時代牛肉は將軍家への献上品、養生の薬と謳われた特権階級のものであったそうだ。ここの肉は品川屠場から直接のものだそうだ。獣医学科にいたころ、この屠殺場を見学したことがある。多くの牛や豚が見る見るうちに湯気を立てながら肉に変わっていく。東京都の食欲

を満たすにはどれだけ多くの命が失われることか。

英語では牛は生きているときはオックスとかカウ。豚はピッグである。肉になるとビーフとかポークとなる。生きている時と名称が変わるのである。日本ではそのまま牛肉、豚肉である。これは歴史の違いで目の前で牛や豚を殺して食べる習慣がなかったためかと思われる。これに対して鶏は昔から食べられていたから肉になると日本ではカシワと名を変えるのではと考える。

日本人は新鮮な魚を好んで食べる。いまでこそ寿司とか刺身が欧米人に受け入れられているようだが、昔は残酷だとか気持ち悪いとか評判は悪かった。文化の違いであろう。新鮮な牛肉は確かにおいしい。明治二十八年、百年を超える歴史の味を堪能して今回の旅を終えた。

(小平市医師会ニュース 第431号掲載 加筆あり)

主治医への遺言

斉藤 三朗

子宮がんで最後をむかえた

片山さん（72歳）

B、C型肝炎から栄養障害になった

午前の診療が終えて廊下に出た時、患者二人がなにか包みを抱えて、

「院長さん、この頃見てないけどやの

姉御さん、入院してるんですね。お見舞いにミカンならいいでしょうか。」

「ええ良いですよ。なんで片山さんのお見舞いなんだね。」

「ええ、姉御さんには普段からお世話になってるんでね。」

「今頃昼飯食べて帰りがたっているんで困ってる所なんだよ。」

片山さんとの付き合いは私の医者
の成長に

この病院に勤めて五年して初めて片山さんが診療所から紹介状をもってきたのだった。病名には慢性B型肝炎にさらに慢性C型肝炎の二つをもったのだった。B型のほうはどうも母親ゆずりのもの、彼女は東北地方生まれの方での理由から考えられた。ウイルスの定量を見てもそう多くはなかったし、抗体も出来始めてたようで、まずはC型肝炎の治療から始めたわけ。

インターフェロンを中心に六ヶ月使用してCウイルスは痕跡程度になったが、完全には消失しなかったがまず成功とみて以後観察することにした。Bはまだ完全に排除できるものがなく同じように外来で、ミノフアーゲンを定期的に注射してたのでした。

しかし肝臓は徐々に肝硬変に進行していった！

片山さんは普段アルコールは飲まないが、付き合いでは少々飲むこともあったという。60歳を過ぎた頃、肝硬変の侵攻とともに腹水が溜まってきた。診療所の紹介状をもって二度目の入院となった。腹水やアンモニアの上昇があつて厳しい治療が続けられて3週間ほどでかなり体調が回復したので退院になった。その後2年間は無事に過ごしたが近所の人がしばらく見ないので訪問した。

片山さん、**全身特に左肩の痛みで動けないと！**

年末までは週一回診療所の外来に通っていたが、それまで食事は自分で作っていたが、次第に億劫になってコンビニで過ごすようになったという。年が明けて正月、片山さんが

床を敷いたきりで、「いたいよー」と叫んでいた。これは大変だとして診療所に行き紹介状を書いてもらい清水ヶ丘病院に救急車で入院となった。どんな顔で病院にきたのが気になったが、私を見た瞬間片山さんは笑顔で「先生またお世話になりますよ」との挨拶には私は驚いた。

左肩の痛みはかなり古い脱臼のものだった

いそぎレントゲン撮影したが脱臼がハッキリと見えた。近くの整形外科医に相談室のMSW渡邊さんが車椅子に乗せて出かけた。

まず先生は長時間かけて整復を努力したが巧みいかず「土曜日だが磯子にうまい整形外科の先生がいるので電話しておくからそこにすぐいつてみては」と。早速渡邊さんは車椅子ごと電車で磯子まで行き、そこでの回復を待った。先生は「この脱臼

はかなり古いものだよ。収まったので2、3日は安静にしてくださいよ。」と汗をかきながらも笑顔で送ってくださった。

地域のお医者さんが土曜日にもかかわらず診て戴いて、その後も磯子の病院にまで電話して治療していただいたにはこれほど感激したことはなかった。

左肩痛がなくなつて本来の病気が出てきた！

おもな症状が取れるともう退院の口ぶりがでてきた。

「先生動けるようになったので退院したいのですが。」

「ちよつとまってね。お腹の腹水がとれないし、貧血が進行してるしね。」
「だるいのは年末からろくなものが食べていなかったせいですよ。病院の食事がおいしいので元気ができました。」

「肝臓も栄養不足からで腹水も増えてますのでもうちよつと我慢してくださいね。」

ようやく納得して片山さんは静かになった。がしかし尿のなかの血液がおさまることなく続いていて、尿の中に異常な大きな細胞がみえてきた。エコーで下腹部を見ると子宮が変形して膀胱にはみだした膀胱ポリープが直径5センチにもなったものがあつた。血尿の原因はこれだったのだ。腎臓は左が変形して腫瘍らしいものがみえた。改めて胸のレントゲンを見ると両方の肺に小さな円形の影が多数見えた。

☆

☆

主治医は回診の時と、昼休みの時をつかって詳しく話をした。

「片山さん。今度の病気は私も想像できなかった大病だよ。既に病気は末期になつてゐるんだ。手の施しようがない状態だよ。あなたならどうし

てほしいか正直に話してくれないか。」

片山さんは目をつむつて、

「少し時間をください。今度こそ私は人生は終わりだと思ひます。本当に有難うございます。」

「私は東北の田舎生まれでして、農家がいやで、一人東北から横浜に流れ着いてそれは苦勞の連続でした。

亭主も二人に恵まれましたが先立たれてしまい、今は天涯孤獨の身になつてしまいました。一人暮らしですから儉約して小錢をためて、どやの正直な人に金を貸したりしました。先日でした二人の人がミカンをもつてきましたがつたりとも正直な人です。」

「だんだん息が苦しくなつてきました。もう話が出来るのは先生だけです。本当にお世話になりました。ごめんなさい。」

午後の時間、片山さんは静かに息をひきとつたのでした。合掌。

※この病歴は「病院便り」29、30号に抄録が掲載してあります。

膀胱がんで全身に転位した

山中さん（72歳）

おれも大仕事やつたんだね

ある日正午に玄関が急に騒がしくなつた。今救急車が入つたのが騒ぎのもとらしい。看護師が「先生この患者さんどうしても入院はやだと大声で叫んでるんですよ。」

さて私の出番。

「どうしたんだね。さっき前の病院から主治医の先生からお願ひされた患者さんだね。あなたは病気からみて入院しなければ行くところは無いんだよ。なぜ入院はいやだというんだね。」

「病気は膀胱がんであちこちに飛び火してもう治らないと言われたんだ。診療所で尿に血が混じったのが原因になったのだったよ。」

「話は入院してからゆつくりと聞くからベッドに行こうね。」

「なんだか俺は先生と馬が合うようだな。」

やがて二階の大部屋のベッドに紹介された山中さん。開口一番「うわーこの病院は特別な病院だ！軟なベッドに羽根布団！おれは生まれて初めてだよ。」それに病室に行く前にシヤワーを浴びてすっかり気に入ったのだった。

「早くこの病院にはいればよかったのに。大病院での検査では手遅れなんだよ、手術や放射能での効果が無いのだよ。72歳をとまで医者が言うのだから自暴自棄になったのが判るだろう。」

今まで全身の痛みで何回も麻薬を

うってたのが嘘のようだと看護師にも話していた。

入院後11日目、朝飯が気に入ったのか「久しぶりに米が食べられたよ。お昼もきつとお粥だろうがこの病院の食事は素晴らしいよ。」

苦勞しっぱなしの60歳代

「俺は身体の丈夫が自慢で若い頃から日雇い一本で日銭で暮らしてたんだ。戦後は一時苦しかったが東京オリンピック過ぎてから景気も良くなつて日雇いは稼げばそれだけ日銭が入り、酒やタバコは好き放題、賭け事もほどほどで楽しかった。女にも苦勞しなかったんだ。でも家庭は持たなかった。面倒臭かったのだったんよ。」

70歳を過ぎた頃、小便が急に赤くなり、友人に聞いても膀胱炎とは違ふようで、近くの診療所での尿検査ではどうも見慣れない大きな細胞が

あり、詳しくは泌尿器科で検査をやつてもらうべきと紹介状を書いてくれたのです。」

そうこうするうちに腰が痛みだし頭もズキズキ痛みだし来たんです。3週間してどこかの病院に移動をと言われて清水ヶ丘病院への紹介状をもらつて救急車に乗ったわけ。

救急車の中で呼吸停止となり急ぎ県立の病院に移動、その時は既に意識がなくなつて呼吸がとまりかけていた。痰の詰まりが原因で気管の中に太いビニール管が挿入されたのです。丁度清水ヶ丘病院への紹介状があつたので、医師から改めて清水ヶ丘病院に電話があり救急車で来たとのこと、また病院であちこち管が差し込まれるのは金輪際いやだといふのでした。

Yさんの生き方に感激して

ある日の回診の後の事、先生が「Y

さん、今夜TVで往年のスター、石原裕次郎の『黒い太陽』があると新聞にあったよ。」という話が小耳に入った。Yさんは寝るまで『黒い太陽』

の話をしてくれた。話の中心は昭和36年だったが黒部に大型の人工ダムの発電設備 大型タービン2台は、2年にわたる突貫作業には苦労があったのだと。

やがて日立から昔の施盤工の経験をいかしてほしいとさがしだしてもらったわけ。2年間働いて「普段は日立の下請け職工として働いていたので仕上がった大きなタービンを夜中トラックで積み込んで映画にあった『黒い太陽』のまだ水漏れがする地下道をゆっくりと進んだことに誇りを持ったんだよ。」Yさんが肝臓がん末期になっても労働者として誇りをもっていたのを俺はその時に感激し涙を流したんだよ。」

☆

☆

そういえばおれも何か誇れるような仕事はなかったのかと寝床に入って考えてみた。

京成線の成田空港までの直行列車建設！

国際空港の成田までの足は不便であつたが、京成電鉄が短期間に直行便の建設を計画した。当時浅草観音様付近で仕事をやっていた俺が当日日雇いで応募、それこそ昼夜で高架線の建設に従事したのだった。夕方浅草まで帰ると富士山が美しく映えていたのが疲れをいやしてくれたのを仲間と喋りあつた。

そうだ「この高架線こそが俺が誇れる仕事だった！」……

その後、彼は満足な顔色をしげし見せてくれながら、3日後遺言らしいことば「俺も偉大な仕事をやったんだ」の口数少なくなっちゃべって、お昼のお粥をすってから静かに亡くな

った。

※この文章は「清水ヶ丘だより」32、33に抄録が掲載してあります。

肝臓がん（ウイルス以外の）で生涯を終えた山之内さん（78歳）

高血圧と糖尿病では優等生！

もう長い事、9年にもなるだろうが、山之内さんとお付き合いは長かった。体格もよくいかにも筋肉労働者だった彼は日雇いから干されて関内の地下道で仲間達と共同生活をおくっていた。毎月一回の浮浪者の救済合同会議で山之内さんは清水ヶ丘病院での検診に受診したのだった。身長は180センチで体重は98キロだった。

丁度私が清水ヶ丘病院に勤め出した頃のこと。尿の検査で見たら塩分がかなり高めの12グラムだったの

で、まず「浜風・はまかぜ」にお願いして食事の塩分をさげてもらった。糖尿はさほど出なかったので、内服剤を使用して様子をみてたが血圧も安定してきた。体格も良いのでエコーで肝臓を見たが左肝臓に脂肪が沈着した以外問題はなかったのでできれば毎日一時間位の外歩きを勧めた。山之内さんはキチンと指示を守ったので、外来では優等生でした。

ある日の午後、体重が急にふえて！

夏場の暑いとき、山之内さんはしばらくぶりに外来に見えたのです。

「暑いので外来は2ヶ月ごとにしてましたがどうしたの。」

「体はなんともなかったのですが、ズボンのベルトがハマらなくなりましたですよ。」

「先ずお腹を見てみようね。おへそが見えなくなるほど膨らんでいるね。エコーでちょっと視てみようね。腹

が張ってる原因はどうも左の肝臓に大きな塊ができた、つまりガンが圧迫したせいでお腹に腹水がたまったんだよ。」

「でも先生は肝臓がんはウイルス、BとかCに多いといったんですね。俺の肝臓にたまった脂肪はガンにはならないと安心していたのにね。」

「そうなんだよね。でもこの夏開かれた『日本肝臓ガン研究会』の発表では、B、Cウイルス以外から発生するというのがあって注目されたのです。たった一例でしたが糖尿病を持った方でした。ですから油断してはならないのです。」

しばらく腹水のたまりに注意していたのか、ちよつと油断すると腹水が増加してくるのですが、しかし12月になると近所のお店では、減塩のものが減ってきたんで、彼が苦勞して遠くまで出かけたのです。

入院しましようね。自宅では限界ですから！

「もう外来では限界ですよ。」と医者も看護師や、医療相談室の渡邊さんや栄養士の石原さんまで入院を勧めたのですが、彼は相変わらず「入院はもう少しですから待ってほしい」と。

彼は外来で「俺の面倒をみてくれる人がもう少ししたら来てくれるので。」

「その人はどういう方なの。」

「今は東北の原発跡地で働いてるんだ。」

可愛いペット、二匹の二十日鼠

やがて山之内さんが12月末近く入院してきました。

そつと私に小声で話してくれたのは、

「じつはねー、俺は一人暮らしです

ので、三畳一間で慰みものとしても
う十年近く二十日鼠を飼ってるん
です。もう今のは三代目ですが車椅子
にも声をかけると上手に乗ってくれ
ます。声も小さいですが飼い主の云
うことも判ってくれるようです。俺
が入院して面倒を見てくれる人は付
き合いから福島に出稼ぎに行った人
しかないのですね。一ヶ月分の餌「ヒ
マワリの種」を用意したのでやつと
入院できたの、ごめんなさい。」

☆

☆

正月から三ヶ月過ぎて会い向かい
の山中さんとの『黒い太陽』の映画
の話が登場してきます。

・・・半ば省略・・・

確か中部電力が北アルプスの山並
みを貫いて巨大なダムを作ったのは
昭和30年初めの事、8年かけて黒よ
んダムが完成したのです。当時日本
では大型の水力発電がなく黒よんダ
ム成功し、黒澤監督のもと、三船敏

郎や石原裕次郎らの男の映画で公開
とともに大ヒットになったのでした。
ちようど回診で診察の際、「スポー
ツ新聞にでていたが今夜『黒い太陽』
がテレビで放送すると、山之内さん
もう見たらどうか。」

「当り前ですよ。俺もこの黒よんダ
ムの発電機を作ったのですよ。映画
が始まった途端、俺も日本一の仕事
の片棒を担げたのだったと、友達と
祝杯をあげたのでした。」

☆

☆

「あの時の感動は一生忘れないです
ね。黒い太陽とはよくいったもの、
俺も大型のタービンを二トントラッ
ク二台に夜中に積んで府中から北ア
ルプスへ、そこから天井からまだ水
が落ちていたトンネルを進んだ時
には感動と鼻水、涙が混じった中、数
時間経って地下発電所についたの
でした。その後タービンの取り付けや
発電開始までの時間は俺の頭には残

っていないのだよ。」

そこまで話すと彼は静かに深い息
を吸って目を開けてじーっと私を見
ながら「俺は大層な仕事をやって命
を終える幸せ者ですよね」とかすれ
かすれ遺言をして鬼籍にはいったの
でした。

【主治医への遺言について】

私の病院は最近療養病院になり、
入院される方も多くが単身か、家族
とかまったく無い患者さんが多いん
です。末期のがん患者もその中に多
くいて、口が利ける患者さんとは最
後まで手を取り合って「主治医に最
後の言葉」を話すのです。

第13回サイパン戦跡巡り

2015年10月12日～19日

美濃部 幸恵

協力 美濃部 欣平

(英語スペイン語訳)

真つ青な海と空、エキゾチックな



Hafa Adai from SAIPAN



日本の皆様、新年おめでとうございます。

僕たちサイパンに住んでいるサイパンダです。
サイのお父さんとパンダのお母さんがロタ島で結婚して
新婚旅行で来たサイパンが気に入って移住。そして僕たち
サイ+パンダが誕生しました。
島には奇妙、カワイイ、思わず笑っちゃう！
いろんな僕たちサイパンダグッズがあらわれています。
素朴で明るくやさしい南洋の島民と楽しく暮らしています。

熱帯植物、色鮮やかな南国の花々、
広いロビーには、英語、日本語、中
国語、韓国語、ロシア語など多国籍
の言語が、ワイワイ、ガヤガヤ、ど
こかのんびりと飛び交います。

南の島のリゾートを楽しむにやっ
てくる若人や家族連れの姿は日本人
とかわりません。平和っていいなあ。

写真の二人の

おじょうさんの
他に、私は中国
のおばさんとも
仲良くなりました。
共通の手段
は漢字。彼女は
中国西安の人。
ロビーのテーブ
ルの上に透明の
プラスチック水
筒置き、手提
げから乾燥させ
たいろんな小片



“一緒に写真撮ってください”とやって来たのは中国のおじょうさん二人。日本の若い人と変わらず可愛くて明るい。日中間の緊迫した関係もとびっきり笑顔で吹き飛ばすといいいなあ。

を取り出し、その中に入れます。
小さな赤いバラは花開き、キノコ
や生姜、果物のかけらなどのエキス
入り即製ドリンクができました。

「美容と健康にいいのよ。」

彼女は達筆な漢字でご自分の住所
も書いてくださった。日本からお手
紙お出ししようかしら？

私にとっては近くて遠い、中国、
西安に。

亡き父が中支漢口陸軍病院の軍医として「お父さんは病気の支那人たちも沢山治したよ」と生前何度も兄に語ったその言葉を急に思い出しました。

☆香取神社（旧彩帆神社）

☆野戦重砲兵黒木大隊慰霊碑

☆アスリート飛行場

☆弾薬格納庫

☆アギンガン岬砲台トーチカ

☆チャランカノア日本人家屋

☆米軍上陸地 江藤大隊慰霊碑

チャランカノア・ビーチ

2015年8月2日にサイパンに上陸した大型台風の爪痕残る戦跡を巡る。

2015年10月14日

☆香取神社（旧彩帆神社）ガラパン

こんもりと社を蔽っていた裏山も樹々が倒され、葉が飛ばされてスケスケになりました。中腹に小さな祠



2015年8月2日の大型台風後、園内や裏山の木々が倒され、まったく様子が変わってしまった神社

2015/10/14 11:35

神社の境内

数日後、日本から香取神社の神主さんが秋の祭礼にいらっしやるとの事。戦後神社の再建のため尽力をつくされた関係者の方々は、どんなにがっかりされるでしょう。

が見えます。その奥に旧日本軍の壕があることも初めてしりました。戦前日本人移民や日本軍の信仰の中心であった香取神社は戦争で焼失してしまいましたが、戦後コンクリ造りのお社が再建されました。小ぶりながら今回の大型台風に耐

えました。しかし、日本から運ばれた鳥居の立派な大しめ縄は、どうなってしまったのでしょうか。

こま犬さん「おすわり」

暴風に吹き落されても 負けません！

隣の大きな石灯籠の屋根も吹き飛



タイフーンにも負けず！こま犬さん「おすわり」

ばされました。

下方の赤い屋根は老人施設です。以前は戦争孤児の日系老人も入っておりましたが、美しい海がのぞめる無縁墓地で眠っておられます。

☆シュガーキングパーク ガラパン

砂糖王松江春次の銅像は、戦時中アメリカ軍の猛爆撃にも、71年後の今回の巨大台風にも倒れませんでした。会津藩士の血を引く松江氏の武士魂が銅像に宿っているんですね。



砂糖王(上)
松江春次氏像とシュガーキングパーク内の倒木(下)

同公園も写真のように、見事だった熱帯樹の太木が倒れたり、枝をちぎられたりし、景観が変わっていました。

☆日本人刑務所跡 ガラパン

島南部観光の定番スポットに日本委任統治時代からの刑務所跡があります。

分厚いコンクリートの壁や塀が崩落して、あちこちに破損が見られました。

サイパンと日本人の歴史遺産ともいえる戦跡や建造物がコンクリートの塊となつて、ゴロゴロ落ちているのを見るのは本当に残念です。

刑務所跡に近い島民の家は、屋根が吹き飛び 窓ガラスも壊

れていて、内部は空になっています。無事に避難したのでしょうか。

この家は、チャモロ人の大家族らしく、いつも大小の洗濯物が沢山干され、南国の太陽を浴びてゆれていましたのに。

☆チャランカノアの日本人家屋

戦前南洋興発株式会社の宿舍であり、戦火と70年余りの歳月を経て現存する2軒の日本家屋。「無事かしら」と心配でした。

「校長先生の宿舍だった」と言われる家屋の方は、チャモロ人の老夫婦からお孫さんの代へと住み継がれてきたおかげで、良好に保存されました。

「停電中だけダイジヨウブ」と気丈に笑顔で家主のジャックさん。

赤いブーゲンビリアやハイビスカス、色とりどりのお花と緑の芝生、古い日本家屋を飾っていた南国のお

花は全滅してしまい、とても御気の毒でした。

「副校長先生の宿舎」の方は、空き家になっていてもともと廃屋に近い状態でしたが、大型台風上陸にも負けず倒れることなく残っていました。けれど玄関から裏口まで暴風が通りぬけたのか、一層傷みがひどくな

って今後どうなるのか、と思います。

アメリカ軍上陸地点

チャランカノアビーチ

1944年6月15日 日米が死

闘を繰り広げた海岸です。

現在この海岸には、2つの慰霊碑があります。

*独立歩兵第316大隊(歩兵第14連隊 江藤 進大尉・岐阜連隊)
人員610人 戦死者585人 復員23名
戦死者の多さに、絶句してしまいます。

少しオレアイ方向に歩くと

*米軍「第2海兵師団」の白い記念碑があります。

アメリカ軍は、毎年サパンにおいても戦死者を英雄として、慰霊祭を取り行っているそうです。



チャランカノア

戦前「副校長先生の宿舎」ともいわれる日本人家屋。



アメリカ軍上陸海岸 チャランカノアビーチ

チャラン、カノアビーチ
「チャラン」は道、「カノア」はカヌーの意味。リーフが此処だけきれていて、外海への水路になっていることから「カヌーの道」チャランカノアと呼ばれているそうです。



独立歩兵第14連隊慰霊碑

目前の海原は碧くおだやかですが、8月の大型台風上陸後の爪痕で、いつものまばゆいばかりに白く輝く砂浜は汚れ、根こそぎになった椰子などあちこち残っています。観光のメインの場所以外は、島中まだまだ片付けられていない現状でした。



大型台風上陸被害後
米軍上陸海岸 カノアホテル裏手

「ソウデロア」上陸す。
8月2日に大型台風が上陸し、サイパンは電柱が800本以上なぎたおされ、島民の多くの家の屋根も飛び、大型ホテルも被害が出る。
主要道路は倒れた電柱や倒木が散乱。電気、水道、電話もストップ。
サイパン国際飛行場も数日閉鎖になり、帰れない観光客も出たとのこと。

60年前の大型台風以上の被害が出た模様。死者が出なかったのが本当によかった。
*「ソウ

「デロア」とはミクロネシア地域の伝説上の首長の名前です。

被害の様子を伝える手紙が届きはじめて異常事態が起こったことがわかりました。

「アメリカ、

グアム、パラオ、ヤップ島からヘルプがあり20%位復旧しています」と書かれていました。

*アメリカ、グアムの援助隊が早急にかつて来る訳とは。

サイパンはアメリカ合衆国の自治領である北マリアナ諸島（Commonwealth of the Northern Mariana Islands）に含まれているからです。

○グアム島はアメリカ合衆国の準州となっており、島の面積三分の一



この時期は日本でも、次々と大型台風が上陸し大きな被害が出ていてサイパンはニュースに出ませんでした。

何度国際電話しても『This phone is out of order』とのアナウンスが。ヨネコさんから9月23日付、電話不通と

がアメリカ軍用地で有事に緊急展開できる戦略要地となっています。

○ヤップ島はミクロネシア連邦4州の中のヤップ州にある。

ミクロネシア連邦は自由連合盟約国として国連にも加盟しているが、国防と安全保障をアメリカに委託している。

サイパンと同じく英語が公用語。

○パラオは1994年よりアメリカ信託統治下より自由連合盟約国として独立した。

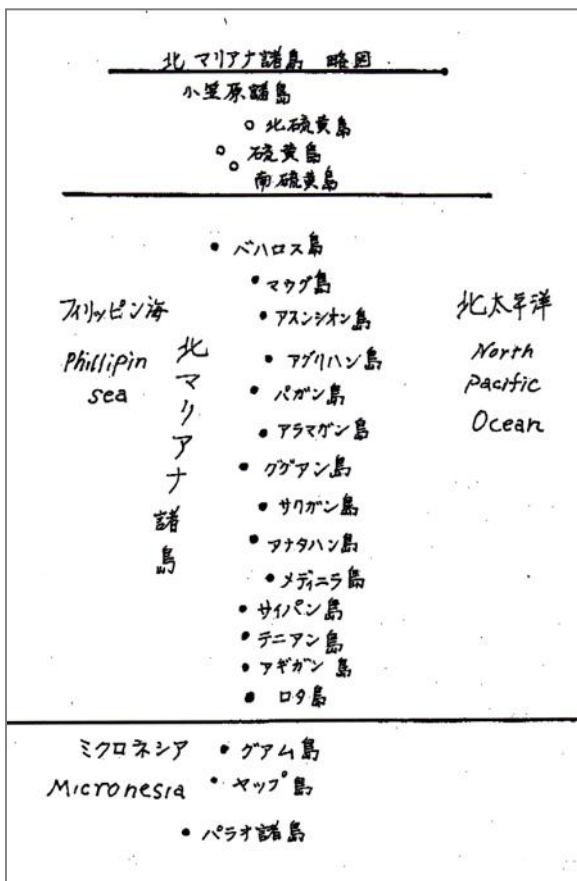
外交権限の一部はアメリカが保持し、安全保障はアメリカが担っている。パラオは自国軍隊を持たないかわりに、アメリカ軍人として採用され入隊している者がいる。

サイパン非常事態に駆けつけた三島は、いずれもアメリカの軍事基地、軍隊と関係あるという共通事情があるのです。

北マリアナ諸島(自治政府 全14島)
と Commonwealth

- バハロス島
- マウグ島
- アスンシオン島
- アグリハン島
- パガン島

- アラマガン島
- ググアン島
- サリガン島
- アナタハン島
- メデイニラ島
- サイパン島
- テニアン島



- アグイハン島
- ロタ島

※現在、人が住んでいる島は、
サイパン・テニアン・ロタの三島。
他は無人島(収穫物のある季節に
短期間人が入る島もあった。)

● 北マリアナ14諸島は

アメリカ主権下で、内政は自治政
府が取り仕切るが、国防、外交権は
アメリカが有する。

北マリアナ諸島自治政府市民は、
アメリカの市民権を持つ。

アメリカが軍事施設の建設、利用
の計画があれば認める。

アメリカは軍事施設の借地代と経
済援助をすることで締結されたのが
コモンウェルズ(自治権)である。

☆Champi上陸す。

2015年10月16日 金曜日

Tropical Storm Champi
滞在中熱帯性暴風雨、嵐に遭遇する。

熱帯性ストーム、チャンピーは
マリアナ諸島を通過しつつ、力を強
め Level nine になりサイパン、テ
ニアンに押し寄せた。(Saipan
Tribune)



上: 去る8月2日の台風上陸で景観が一変した眺め。
下: ホテル客室バルコニーからの以前の眺望

去る8月2日 60年ぶりに、サイ
パンを襲った大型台風の被害が残る
南洋の小島に、再び台風が上陸。
10月16日、朝から不穏な天候、
いつものように停泊していたアメリ
カ軍の集積船は安全圏に避難したの
か一隻も居なくなる。
次第に荒れだし、夜から明け方ま
で猛烈な風雨、ドツドツ、ドツド

ドツとい
う地鳴り
と共に海
辺のホテ
ルを襲い
ます。
すでに
8月の台
風で、南洋
の楽園そ
のものの、
美しいハ



2度目の台風一過 10月17日
手入れの行きとどいた大木も折れてしまいました。

イアットリージェンシーの庭園は、
様変わりしていましたが、さらに無
残なことに。

いつも大勢で出迎えてくれる海鳥
たちの巣も吹き飛んでしまったので
しょうか。

私たちの到着日と帰国の朝、荒れ
た庭園に飛んできてくれた2羽の白

い姿を見ただけでした。

復活の日まで

旅人の木ラベナラも、南国の空にそよいでいた椰子の木々もみんな葉をちぎられ枝を折られて、焼け野原に林立する杭のようになってしまいました。

ハイビスカス、ブーゲンビリア、プルメリアなどの花々は吹き飛ばされ、葉は塩害で茶色くなりちぢれてしまいました。

ドンニー野戦病院跡や地獄谷の最後の司令部跡、井手次郎海軍軍医のいらした洞窟跡などの奥地戦跡はどくなっているでしょう。



暴風でもぎとられた椰子の葉の一枝。思ったより重くて、持ち上げられませんでした。こんな重い葉がボキボキ折れて吹き飛んだなんて！



ハイアット敷地内の旧日本軍トーチカに行ってきました。トーチカは以前から、マリンスポーツクラブの倉庫として「現役」なのです。が今朝は濡れた用具類が外で干されていました。



現地の人とはとにかく明るい！「カウンター
の屋根が無事でヨカッタ」と感謝の言葉。セ
ッセと吹き寄せた砂の山を丘づけています。
マリンで働く日本のおじょうさんまで負け
ずに明るい！「コロナ笑いながら重労働し
ている……やっぱり南洋の島になあ。」



自然と共生している南洋の島は、人も草木も大らかでめげない。

家々の屋根が直り、電気、水道、電話が復旧し島民の幸せな日常生活が戻りますように。

雨でうるおった大地から南国の太陽を浴びた植物は再び芽吹き、花々を開花させるでしょう。6月が来ればきつとサイパン桜の真紅の花が島を彩ってくれるでしょう。

もう一度南国の樂園に復活したサイパンに会いたいな。

もう一度英霊方や戦没犠牲者の声こだまする島を訪ねたい……………。

国際線に乗って、海を渡ってまだ行けるだろうか？

私たちは年を取ってしまったけれど。

《参考文献》

玉碎と自決の島を歩く 小西 誠
社会批評社

北マリアナ諸島 ミクロネシア連邦
グアム ヤップ島 パラオ
Wikipedia

歩兵第135連隊の思い出 歩兵
第135連隊史

《協力》

ミセスヨネコバルシナス

ヨネコさんの家も大型台風サイパン上陸による大きな被害にあわれ、大変ご苦労されていました。

凄まじい当夜の様子、台風通過後の街の様子を語っていただきました。

アキオ ツダさん

台風から2ヵ月以上、ご自宅はまだ停電中とのことでした。

ツダさんが、熱い思い、祈りを込

めて案内してくださる南部戦跡も、暴風雨の影響で一層劣化が進んで胸が痛みます。

*「生還！バンザイ突撃に参戦した軍医中尉」のエピローグは春季号にさせていただきました。

猿年の徒然の記

秋 元 光 博

俳句に関する入門書は掃いて捨てるほどあるのに、川柳に関する入門書は甚だ少ない。このことは、俳諧という同じ源泉から分かれた俳句と川柳でありながら、両者に対する社会的評価の格差が生じた所似の一つであろう。

川柳に対する誤解を解き啓蒙する努力に欠いたのではないか。言い換えれば、川柳界は実作者の多いわり

に、評論家が少なく、学問的大係化も見られていない。川柳に関する論説や識見を有する指導者の少ないことが、文学的位置の誤解につながっていったのではないか。

現況をみると、川柳の人口の増加と、マスコミも川柳を取り上げるようになったことが相まって、まさに川柳の開花を思わせる盛況ぶりである。

しかしながら、川柳に対する一般社会の認識には、まだまだ誤解や偏見が多く見受けられるようだ。川柳人口の老齢化という問題もあるが、わが国の平均寿命は、過去最高を更新して、女性は85歳を超え、男性は78歳をクリアした。高齢者の活躍に期待する点も多々あるのではないだろうか。

加齢または老化とは、樹木に例えれば年輪を重ねることであろう。しかしながら一般に老いという言葉か

らはネガティブな印象が強く、生産性のイメージが稀薄なようである。

暦年齢よりも若々しく活発に活動する方もおられるが少数派だ。

若さを持ち続け、高齢になつても積極的に仕事をこなす人の多い職業は、芸術家だよく言われる。芸術家は、必ず何かのビジョンを持ち、いつも創作し続けているからであらう若く生きる秘訣は、若く生きていく人に出会うこと。生涯を若く生き抜いた先人に、仕事や作品を通して出会う努力を怠らないことだと思う。

人は、老いてから病気になる、体力だけではなく、精神力も急速に減退する。心身を積極的に使うことよりも、用心のために過度の安静に傾き、それがかえって治癒を遷延させる可能性が大である。老木の根っこから、活き活きした緑の若木が顔を覗かせるように、老いの体に内在する生命力と、修復力、そして今ま

で培ってきた年輪の厚みを、是非とも後進のために、社会に還元してほしい。

川柳における約束ことは17音字だけで、紙切れと鉛筆さえあれば、誰にでも出来るという啓蒙の仕方には落とし穴があるようだ。川柳組市易しという錯覚である。

そういう観点からすると、一般人の目にもっとも触れるのはマスコミ川柳であり、時事川柳や世相川柳の投句こそ蔑ろに出来ないと思われる。

現代川柳はレトリックを駆使した句が多くなっているようだ。比喻は心象風景の点描であり、新しい現実新しい比喻でしか表せないのであるが、比喻を用いるときは、よほど心しないと作者の思いが読み手に伝わらない危険性もあると思う。人間を詠う川柳が、そのイメージによって、独特の時間的空間を構成するよ

うになつてきた結果、隱喩的表現は、往々にして句が難解となり、鑑賞者の読解力が要求されることとなる。

17 音字の中に思ひの丈を押し込め、それに韻律を持たせる奴力の中にこそ、川柳作句の魅力が存在するのであつて、その過程に比喩の選択という、難しい作業も入ってくるのだと考へたい。

短詩文芸と散文の違いは、大雑把にいつて韻律があるかないかの違いだと思ふ。川柳は17音字の詩形で、他の短詩型文芸の後塵を拝しながらも、その命脈を今日まで保つことが出来たのは、昔から言われてきた三要素のうちのひとつ「穿^{うが}ち」に負うところが大きかつたと思われている。現代川柳は、これまでの三要素によつて分類できるようなものではなくなつた。本音を吐かず、没個性の画一化された句ではなく、作者の主

観的世界を描く叙情の一行詩としての傾向が強まつてきているようだ。

現代川柳は心象風景をいかに言霊に移入するかであらう。

一般的に川柳は歌俳に比べて、より卑近・通俗である。川柳の批判精神とか風刺精神が、別情性を好む日本^のの精神風土に受け入れられなかつたということが考へられる。

また川柳は歌俳とは異なつたものの見方、考へ方、対象の捉えかたをする文芸だからであらう。人間諷詠の川柳の目は、人間の生き様や想い、雑多な社会生活のいろいろな断面にも踏み込んでいかざるを得ない。

したがつて見かけの卑近さ・通俗性の奥に潜んでいる事実を読み取る努力をしなければならぬ。川柳とは透徹した目で、自分を含めた人間を見つける一行詩であり、口語という平明で俗っぽい言葉を用いて、文明批評を展開することではなからう

か。

翻つて現況を見るに、ペーソスの氾濫と批判精神の希薄を指摘する識者もおられる。時事川柳や世相川柳に対する我々の姿勢が、川柳の啓蒙に大きくかわつてゐることを忘れてはならない。

川柳は文明批評の文学とも言われるが、政治はもとより世相にも鋭敏に反応し、矛盾や不条理をつまし出してこそ存在価値があるものと思ふ。柳俳の接近が指摘されており、両者の区別が判然としないような作品に遭遇することが間々ある。しかし、川柳という文芸が、他の短詩型文芸の中に、埋没されることなく、その比喩も今日まで保つことができたのは何であらうか。

いろいろの分野における創作とは、五感を通して得た象風景を具体的に表現することであらう。そして、作者の感動が鑑賞者の胸中で再生産さ

れるものでなければならぬ。17 音字で思いの丈を表現する川柳とて例外ではあり得ない。

人間諷詠の川柳には、季題とか切れ字の約束はなく、あくまで自由奔放に、平言俗語に親しみ、人生の機敏を穿つところに真骨頂がある。真実ほど強いものはないが、事実だけの描写で終われば報告川柳の誇りを受けるであろう。

虚実の中から人間性を探し出す努力こそ求められる現代川柳は作者の主観的世界を吐露する叙情の一行詩としての傾向が強まっており、文明批評を根底に置いた人間性の探求こそが、川柳の存在価値かとも思われる。そういった点からも、アレゴリー（譬喩）やメタファー（暗喩）も念頭に置いて作品に対峙する必要があると思うと思われる。

短詞文芸の中で、川柳がまだ他

のジャンルより低次元のものと誤解されている遠因は、川柳史のほぼ半期に相当する狂句百年がネガティブに作用していることは否定できない。また、古川柳では叙事が主流で、文芸にとつて最も大切な創造性に乏しかったことと、作品に作者名を冠しなかった事も後進性を問われる原因の一つであつたろうと思料される。

古川柳と現代川柳の大きな相違点は、前者は客観的描写、即ち叙事が主流をなしていたのに対して、現代川柳では、個の目覚めによる心象・情感の移入が前面に出て、読者にとつての共感度を一様に論ぜられない点であろう。

一つの発見を17音字にまとめあげるためには、的確な比喩なくしては表現できないと思う。その際の言葉運びが独りよがりになると伝達力の低下となり、難解句の誇りを受けることになるのではないか。

心象作家といわれる人々の句の中には、理解に苦しむ借辞がよく見受けられる川柳は言葉遊びや謎解きではなく、17音字に託した想いが第三者に理解されるものでなければならぬ。従つて、大多数の人の共感が得られるような言葉遊びに心を砕かねばならない。また、17音字という枠組みの中で韻律をもたせる努力も当然と思われる。

良い句とは、作者と同じ地平で鑑賞できることが望ましい。そのためには、「読書三到」「読書百遍義自ずから見る」の譬えの如く、多くの作品を読むことに尽きるのではなからうか。

「山路を登りながら、こう考えた。智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。とにかくこの世は住みにくい。住みにくさが高じると、安いところへ引き越したくなる。どこへ越しても住み

にくいと悟った時、詩が生まれて、画ができる」

これは、漱石の「草枕」の冒頭の一節であるが、人の世はどこへ行っても住みやすいところなどないから、ストレスを発散させ、精神の平安を得るための詩や絵の趣味を勧めているのであろう。

最後にサミュエル・ウルマンの詩「青春」を添えて筆を擱く。

青春とは人生のある期間ではなく心の持ち方を言う

バラの面差し、紅の唇

しなやかな手足ではなく

たくましい意志、豊かな想像力、

燃える情熱を指す

青春とは人生の深い泉の

清新さをいう。

青春とは臆病をのける勇氣

易きにつく気持ちを振り捨てる

冒険心を意味する

時には二十歳の青春よりも六十歳の人に青春はある。

年を重ねるだけでは人は老いない理想を失う時はじめて老いる

歳月は皮膚にしわを増すが

情熱を失えば心はしぼむ

悲嘆の構図にさらされる時

二十歳であろうとも人は老いる

頭を高くあげ

希望の波をとらえているかぎり

人は青春に終わる

【川柳】

党名が泣いている維新泥試合

安本法廃止への足が揃わない

根を枯らすまいとみんなで反戦歌

日向ぼこ体のたがも外れそう

アルバイト出会もあれば別れあり

怖ず怖ずと平均寿命越えてゆく

人波に高く濃ふ熊手かな



2016年（平成28年）謹賀新年

日本医師会

会長 横倉義武

洋楽部部长 松木耀子

日本薬剤師会

会長 山本信夫

新春を寿ぎ、同好者の入会を歓迎します

写真部部长 竹腰昌明

公益社団法人東京都医師会

会長 尾崎治夫

日本医家芸術クラブ再生委員

美術部部长 白矢勝一

日本医家芸術クラブ委員長

太田 怜

日本医家芸術クラブ再生委員

美術部副部长 鈴木啓之

よきエンをエテ うきことをサルの年

描く楽しさ 見る楽しさ 秋に絵画展を開きます

日本医家芸術クラブ副委員長

初芝澄雄

日本医家芸術クラブ再生委員

文芸部 安井廣迪

2016年(平成28年) 謹賀新年

日本医家芸術クラブ再生委員

美術部

津谷 喜一郎

またよわいを重ねました
本年もよろしく願います

美術部

飯田 収

新春をお慶び申し上げます

式場 隆史

医療法人 式場病院

本年、富山県水墨美術館(28・6・25)と碧南市藤井達吉現代美術館(28・8・20)にて「鬼才―河鍋曉斎展 幕末と明治を生きた絵師」を開催予定です。

文芸部

河鍋 楠美

蔵市 蔵眼科

公益財団法人河鍋曉斎記念美術館

三猿はダメ、良く見て、聞いて、叫ぼう 新しい年こそ!

邦楽部・文芸部

佐藤 玄祥(博)

中野区鷺宮四一四三十一六 三法指圧所長 指圧師・薬剤師

謹んで新春のお慶びを申し上げます

文芸部

出来 尚史

迎新春人興財旺 賀佳節富貴吉祥

文芸部

豊 泉 清

〒三七〇・〇八五一 群馬県高崎市上居町四一六

新年おめでとございます 書道部の活動がないのは残念です

書道部

二宮 文乃

〒四一三・〇〇一五 熱海市中央町四一十七

新春をお慶び申し上げます

文芸(俳句)部

福 富 清子

東京都 品川区

2016年（平成28年）謹賀新年

謹賀新年

文芸部 藤倉 一郎
〒三六四・〇〇〇二 北本市宮内一・一二二

迎春 本年もよろしくお願いいたします

サイパン戦跡めぐり

文芸部 美濃部 欣平

美濃部 幸恵

鎌倉市極楽寺

文芸部

吉元 昭治

吉元医院

会員の皆様のお役に立てる様努めます。ご指導ください。

日本医家芸術クラブ事務局

〒一八七・〇〇四二 東京都小平市美園町一・四・十二

電話 〇四・一三四四・八〇五六

FAX 〇四・一三四四・〇八七九

※順不同にて掲載

多数の年賀広告のご協力ありがとうございました。



医芸俳壇



兵庫 廣辻逸郎

御朱印の白衣連れ立ち照紅葉
影深し秋のこぼれ日地蔵座す
秋深し法灯絶えず人絶えず
車ならと大南瓜を選びくれ
厚き手やもぎ取りくれし秋なすび

青森 秋元光博

〈仰ぐ岩木嶺〉

里山に灯の洩れている夜なべかな
もてなしと言ふも茸の飯なりし
逢えばみな山の顔して茸狩
足湯して仰ぐ岩木嶺鳥渡る
銘銘に押し黙りある茸狩

静岡 岩本漂人

アオサギの空の濁声二羽となる
ひつち田は管理地となりケリ鳴けり
サツカーのゴールに一羽寒ガラス
アオサギとダイサギ飛んで右左
雲間よりマガンとなつて降りてくる

新潟 中村雄彦

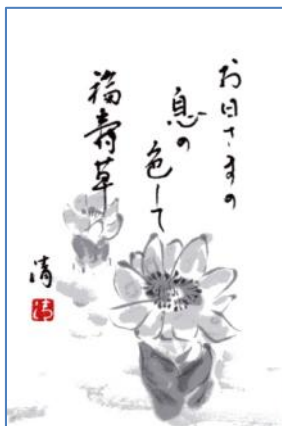
打ち捨てしゴルフバッグに秋日射す
日傘さし腰曲げ歩む帰り道
夏山の青き山並雲かかる
夏服にずれたバッグで登校す
重たげなカバンを背にして夏の朝

東京 福神規子

人の世に迷ひの多し石路の花
冬の蝶飛ばねば死ぬるかもしれず
チャプリンのやうな人ゆく街小春
枯蓮や虚無僧をりし世も遠く
夜霧湧き謎めいてきし枯木立

東京 福富清子

残る虫何かこの世に忘れもの
名月をさわたる雲に息合ひぬ
顔を口に歌ふ園児や柘榴熟る
湯豆腐や薬味にこだはる嫁姑
誕生日あつてなく過ぎ秋深む



医芸柳壇



〈生甲斐〉

青森

秋元光博

長生きの談笑響く過疎のお湯

苦虫を噛み潰せない総入れ歯

長生きはめでたいのつて孫が言う

生甲斐を背負つて登る秋日和

核の傘さして隣の核を責め

群馬

豊泉

清

健康法一切無視して健康体

一億総いつかは来るぞ動員が

海外で戦つていいスポーツは

天高く二言目には痩せたいな

ダイエット口にしながら箸進み

医芸歌壇



父母姉のかげ

青森

秋元光博

むらくもに初日はみえずあしたには光の見ゆるや国のゆくえも
立ち止まりしつかり眺む釜臥山の傍へと燃ゆる夕やけ空に
胸ふかく思いをひとつまたひとつ畑にこぼして今日の風すがし
生かされて生きている生をどう生きるつれづれに思う臥す正月に
風の匂ひ水の匂ひをかぎて佇つ里の木橋に母のかげあり

門

東京

小松安彦

青春はいつ終はりしか壮年はいつまで続く冬の穂高よ
校門の前に立ちをり五十年前の中学入試を思ふ
節分の席より離れ公園に「鬼は外」の声独り聞きをり
水仙のあはひに座りフローラは幼を抱き仰ぐ白梅
山頂を二回踏みたる常念のはるか彼方に遠く去り行く

晩秋

茨城

羽生藤伍

散歩路の老人ホームの柿の実たわわは撓たわに成りて朝日に映える
わが庭の緋鯉みごもり綾の腹紅き模様を水面にみせる
水戸文化センターに孫ら選ばれてコーラスの窓に四もとの銀杏
東京のホテルルームで同窓会孫もつ医師等7人つどい
水やれば二つの鉢に垂直と水平に伸びる紅き花弁びん

壇尻

茨城

羽生藤伍

疾走す山車だしの屋根にて若者が躍る楽車だんじり大阪の街
街角をスピードで曲る山車だしの屋根うちわ扇両手に若者踊る
大阪の岸和田町に人溢れ数十台の山車囲み行く
御落胤と云わる名僧一休の古寺に詣でて京都より帰る
窓外を地球が疾走する如し新幹線の秋の景色は

宮参り

東京

横田英夫

父母ともに剣道五段の第一子男児出生のメール入り来
ひい孫の宮参りにと誘わるる嬉しと思ひ杖つきて行く
若者の古き日本のしきたりに心惹かるるを見るは楽しき
一瞬みづひに面の入りて全日本剣道選手権優勝決まる
みどり児のかかる試合に出づること夢には非ず見守りて行かん

《詩》

青森 秋元光博

年が改まり

父母はいま

雪道のどのあたりを歩き始めたろう

そして姉は

父母と姉の眼は

篤信の人の眼

弟は頑固に忠実

そうして長く短いそれぞれの生涯は

どこまでも家系のもの

深い夜の悲しみ

百合の紅いろが底光しつつ闇の中から

響いてくるような色調……

ルオーが画布に遺した

冬の郊外

葱の白さ青さが鉛筆の先端から溶け出したような

早春の雪景色……ゴッホの手が生んだ
アルルの郊外

東京を

一生歩みつづけた

姉

その魂

遺影の父母姉とひとりむきあいながら

ぼくは耳をかたむける

雪明りの道を踏む

ルオーの

ゴッホの

遠く たゆみない足音に

感竹管演奏（竹管の演奏に感ず）

青森 秋 元 光 博

高朋雅客満空楼

高朋雅客は空楼に満ち

法雨蕭然鳥髪優

法雨は蕭然として鳥髪は優かなり

三曲好調無限趣

三曲は好調にして無限の趣きあり

応知竹管遠牢愁

応に知るべし竹管は牢愁を遠ざくを

永年の修練に支えられた演奏、法雨の心技は寂然不動。緩急自在、しつとりとした音色、微妙な韻律を醸し出して客席を魅了、伴奏者としての琴と三弦も適意よろしく、三位一体となつて幽玄の境地を会場に伝えてくれる。これからも日本古来の雅の雰囲気に入り、心の優しさに素直に感動し、称賛したいと思つて

春季号・夏季号 原稿募集のお知らせ

次号（春季号）締め切り

平成28年2月29日（月）

次々号（夏季号）締め切り

平成28年5月10日（火）

毎号、会員のみなさまのご協力、誠にありがとうございます。

今号（冬季号）の発行が予定より遅くなつてしまったので、春季号の締め切りを少し延ばしました。ご投稿お待ちしております。

今回も二季号分の原稿を募集させていただきます。掲載季号の指定がございましたら、その旨も原稿送付時にお知らせください。何も記載がなければ原稿到着時点での一番早い季号での掲載となります。

引き続き、会員の皆様のご支援ご協力をどうぞよろしくお願い申し上げます。

※一部500円にて機関誌の追加購読も承っております。ご希望の方は事務局までお知らせください。

アンコール掲載

『メキシコ・オリンピック』

旅行記念④

日本医家芸術クラブ 編



一九六八（昭和43）年十月十二日、第十九回メキシコオリンピックが開幕した。東京オリンピックが一九六四（昭和39）年十月に第十八回として開催したので、東京の次の夏のオ

リンピックだ。

当時の日本医家芸術クラブには『旅行部』が活動していたらしく、その旅行部がメキシコへオリンピックを見に行つたときの旅行記が発行されている。25家庭33名の方がこのオリンピック旅行に参加されている。2名の添乗員が付き添い13泊15日で、サンフランシスコ、サンアントニオ、メキシコシティ、クエルナバカ、アカプルコ、ロスアンゼルス、ホノルルと7都市を旅している。旅行された方のうち、11名の方がこの旅行記にご投稿されているので、その旅行記を順次ご紹介していきたい。尚、本文は原文のまま、掲載写真は印刷されたものをスキャンしたものなので、画質の悪さはご容赦願いたい。



【旅行日程表】

一九六八（昭和43）年10月

10日 東京発

サンフランシスコ着

東京国際空港より大型ジェット機にて出発、一路サンフランシスコへ

到着後、ホテルにて休息

午後・サンフランシスコ見学、マーケット通り、官庁街、ツインピークス、金門公園、金門橋、漁夫の波止場、チャイナタウン

11日 サンフランシスコ発

サンアントニオ着

サンアントニオ発

メキシコシティ着

サンフランシスコよりメキシコシティへ、途中サンアントニオ市見学

12日 メキシコシティ

第19回メキシコオリンピック

開会式に出席(午後一時〜五時)
13日 メキシコシティ

午前…メキシコ市見学、チャプルテペック公園、ゾカロ広場、中央政府、大寺院、国立人類学博物館等

午後…オリンピック陸上競技見学

14日 メキシコシティ

午前…ティティワカンの太陽の神殿、ピラミッド見学

午後…オリンピック重量あげ見学

15日 メキシコシティ

午前…オリンピックバレーボール見学

午後…オリンピック陸上競技見学

16日 メキシコシティ発

クエルナバカ着

メキシコシティより、クエルナバカ經由にてアカプルコへの3

日間のバス旅行

17日 クエルナバカ

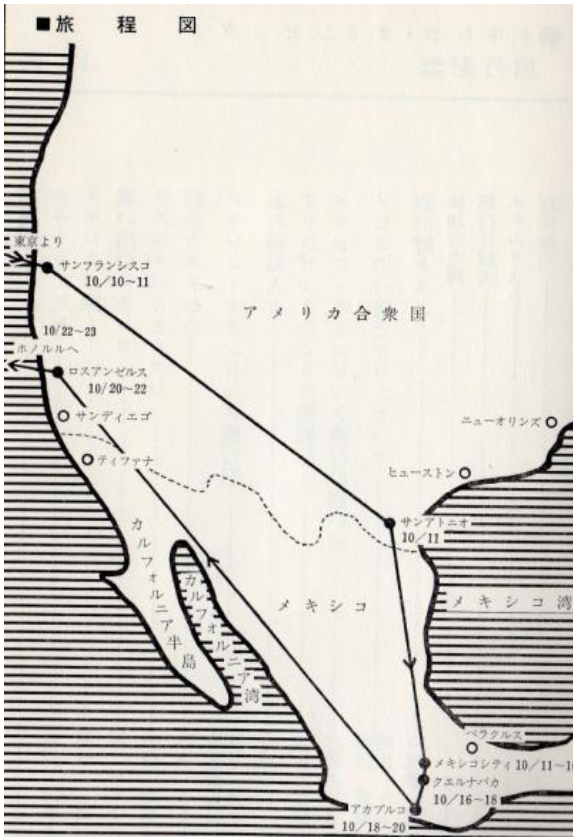
クエルナバカ見学、夜はメキシコ政府主催のオリンピックパーティに出席

18日 クエルナバカ発

アカプルコ着

19日 アカプルコ

クエルナバカよりアカプルコへボートにてアカプルコ湾巡航、夜はラ・ケブラダの崖上からのダイビングシヨウ見学



20日 アカフルコ発

ロスアンゼルス着

オリンピックヨットレースを見学、午後の便にてロスアンゼルスへ向かう

21日 ロスアンゼルス

ロスアンゼルス見学、ハリウッド、ビーバリーヒルフアマーズ、マーケット、チャイニーズ劇場、オルベラ街等

22日 ロスアンゼルス発

ホノルル着

ホノルル着後、オアフ島見学、ワイキキビーチ、ダイヤモンドヘッド、ハワイ大学、パンチボールの丘、真珠湾、ヌアヌパリ等

23日 ホノルル発

パンアメリカン大型ジェット機にて一路東京へ

24日 東京着

東京国際空港着後解散



忘れ得ぬ人々

金成 桂一

序章

川端流に——長いタラップを降りると、其所はシスコの街だった——とでも書き出せばとも思ったが、文才の無い私には到底無理なはなし。

無条件に楽しい「旅行」——について今更のようにしかつめらしく定義づけよう、などと野暮な事も考えない。

陳腐だが——紬ふれ合うも他生の縁——。

国木田独歩に非ずとも、私にも矢張り、知らぬ他国で偶然に袖をふれ合わせた何人かの人にまつわる想い出がある。

私の書かんとするのは忘れ得べからざる人——例えばドクター・フナバとか、ドクター・ノグチとか——ではなくて、只何となく、そのくせ、どうしても忘れ得ぬ人についての一寸した連想に過ぎないのだが……。

第一章 ミスター・ポール・ミッチェル

既に御存知、本場のシスコのヒッピー通りで知り合った典型的なヒッピー少年。

シェラトン・ホテルに荷物を置いて、早々にとび乗った観光バスにゆ

られて、慣れぬジェット機の長旅の退屈さと倦怠とを堪えながら小休止の為に停車したバスの直ぐ側で、私はアメリカでのスケッチブックの第一頁を書きはじめようとしていた。

「私は腹が空いている。すまんがクワラー（百円＝二十五セント）預けませんか？」といきなり私に話しかけて来た蓬髻^{ほうはつびげ}だらけの乞食のような男。

私は黙って二十五セントをつまみ出して、手渡してやった。サンキューも言わずに行き過ぎようとしたので「すまんが、君の姿をスケッチさせてくれないか？」と言いながら、もう二十五セント手渡してやったら、あつさりOK。本場のヒッピー族の

考え方やその生態のいささかなりとも知り得る絶好の機会と思つたので、彼をスケッチする振りをしながら、数少ない私の脳中のボキャブラリーを絞りながら、私は一生懸命彼と話した。

「日本を君はどう思うか？」——
「美しい、国ということは聞いて知つている。」——「何故にそのような身なりをして無為に日々を過しているのか？」——「世の中のすべての偽善に飽き飽きして人間の本性にかえりたいのだ。」——もつともつと種々の問答をかわしたのだが、省略する。

最後に、私はゆつくりと発音しながら「ところでベトナム戦争は？」

と聞いたら——

「たつたひと言——」「ナンセンスだよ」

「私も日本人旅行者として本場のヒッピーの君と知りあいになつた事を大変に貴重な事と思うので、日本へ帰ったらクリスマスカードの一枚なりと送りたいと思うのだが、名前と住所を知らせよ」と半分も言い終らないうちに「クリスマス？そんなもの一体なにになるんだい。ナンセンスだよ。」と言う。

グッドバイを言う前に差し出した私の手を握りながら——「僕の名前？マイネーム・イズ・ポール・ミツチエル。字なんてないよ。」と吐き捨てるように言うところりと踵をか

えして、肩をすぼめ、前こごみの、
のめるような歩き振りで、ズック靴
を引きずりながら、霧深いシスコの
街角に消えて行つてしまった。

ポール・ミツチエル——それは、
エトランジェの私にとつて、謂わば、
シスコ路上のローリングストーンに
も比すべき、ゆきずりの一少年にし
かすぎないのだが、其のブロンドの
房々と肩まで垂れた美しい髪の毛と、
澄んだ透き通るような青い眼と——
そして、それ等に不思議にマッチし
たカッコいいボロ服とが、何がなし
に忘れ得ないのである。

極度に発達しすぎた機械文明への
叛逆なのか、或は又、純粋な気持か
らの、比の人間世界の矛盾と相剋^{むじやく}へ

の若者のせめてものレジスタンスな
のか、いずれにしても同じ年頃の子
供を持つている父親としての私にと
つては、どのように、焦点をしぼつ
て考えてよいのか迷うだけだった。

さもあらばあれ、私は十数年来兼
ねてから何時の日にか海外旅行のチ
ヤンスもある事を予想して、一日も
かかさず英字新聞を読み続けて来た
日頃練磨（？）のとはお恥しいが、
私のプアーイングリッシュを最初に
理解してくれたアメリカ人という意
味でも彼は忘れ得ないのかも知れな
い。

そして、これからも霧の深い日な
どには、フット何処からともなくあ
のポール・ミツチエルが忽然と現わ

れて来るような錯覚に悩まされる事
だろうと思うのである。

第二章 ミス・レーン・レーリー

「花の街」——クエルナバカで知り
合つた、セニョリーター、と言つて
も、七十歳の老女。

沛然たるスコール一過のあとの、
さわやかな「ヴィラ・インターナシ
ヨナル」の内庭の芝生は眼に泌みる
ほどの青さと、まるで高価なカーペ
ットの肌ざわりのような感触で、ス
リッパから半分もはみ出している私
の素足を擦^{くす}ぐるかのようだった。

オリンピックで、そわそわと沸き
立つ華かなメヒコシターをあとにし
てアカプルコへのバス旅行を開始し

てからの延々たる長旅――。

然も、耳がキンキンするほどの高いメキシコ山脈を横断する為に、落漠たる単調なイエローオーカーの崖肌と、つかれたグリーンサボテンの原野と、飽き飽きするほどに繁茂した椰子林とビンロー樹の中の一本道をうんざりするほどゆられ続けて、やっと辿り着いたあとだけに余計芝生すらが、しつとりと嬉しく感ぜられたのかも知れない。

私はホテル到着と同時に軽い夕食をすませて、内庭にあるプールサイドのベンチに腰をおろして、芝生の青さとクリーム色の壁をもった円形のホテルの部屋並みと、それに丁々として聳える椰子の大木のコントラ

ストに、画情を誘われるままに早速スケッチブックを取り出して筆を走らせはじめた。いざ書き出してみると、眼に見たほどにはまとまりにくいコンポジションなので、いささかいや気がさして、一寸一服と煙草を口に喰わえてフット一と息入れた。その時、突然私の背後から綺麗な透き通るような女の声で、「貴方は日本の医者か？ それとも画家か？」と不意に声をかけられた。

私は突嗟に後を振り向き乍ら、出まかせに「ヤー・アイム・ドクター・アンド・ペインター・ギース」――医者でもあるし、絵書きでもある――という意味の積りで返事をしたわけだったが、果して、こんな会話が

正しいのかどうかあやしいものだが、いずれにせよミス・レーンとの交際の第一景はこんな具合だった。

「今日の夕方、日本のお医者方が来るといふ事はメイドのカルメンから聞いていたので、私は心待ちしていたのだ」と言う。細い銀椀の眼鏡の奥に柔和な細い瞳に笑みをたたえて彼女はしゃべる。然し、彼女は両手で、日本では医者の私ですら、初めて見るような三つ又の、しかも滑車のついた杖について立っている。

私は早速斜めに構えて足を組んでふんぞり返って掛けていたベンチの半分を慌てて空けて、「プリーズ・テーク・ヨア・シート」と言ったら「残念乍ら、私は誰かの手を借りないと

足と腰が悪くてベンチに腰を下ろせないのだ」というので、「何故か」と聞いたら、「私は慢性関節ロイマチスを保養する為に比所へ来ているのだ」と言う。

私が抱きかかえるようにして、座わらせてやったほんの瞬間だったが、苦痛を堪える表情をしたが、座り終った途端に「サンキュー」とほほ笑みかけて来た。

「何故貴女は日本人の私に、そのように、関心を持ったのか？」と不躰とは思ったが、聞いてみた。

夜の七時半というのに、南国メキシコの夕空は、やっとオレンジ色に色づいて来て、遠い雲の中にしまっている記憶を読みとるような限差し

で、眼を細めて、ゆつくりと、私に向って語りはじめた。

「私は一九三六年、ジエズスの使徒として（つまり宣教師としてか？）

日本のナラに行った。私はそれまで、日本についての充分な認識も知識も何もなかったが、船旅の間に、日本に関する出来だけ多くの書物を読んだ。それに、日本郵船のボースンから直接話を聞いたりして日本を理解しようと思った。ナラは本当に美しい街だった。そして、私の周りの日本人の人々もすべて私を満足させるに充分なだけ親切だった。然し、何んとしても、残念な事に、一九三七年上海でアメリカと日本とがアフエア（上海事変^{けいぎ}）を起したのを契機に

して私は止むなく命令で、ワシントンの自宅へ帰って来てしまったのだ。

ナラも、キョートも、トーキョーも、

そしてホツカイドーも、すべては私の美しい心の想い出として私は今でも充分に覚えていたのだ。日米戦を知った時、私は驚いた。——そして、束の間の知り合いとは言いながら、あんなに善良な日本人々がパールハーバーをだまし撃ちたのだなどという事も、考えてもみたくなかったし、そして、亦、信じもしなかった」

余り流暢にしゃべられると、いささか私の方で合いの手を入れて「一寸待ってよ」「すみません、もう一度……」と何回も何回も同じ事を開き

返す始末だった。

四方山の話の果てにレーン私は私に言ってくれた。

「貴方は兵士としてアメリカと戦ったのか？」と、細い眼を無理に大きく見開き、私の顔を覗くように反問して来た。「いずれにしても日米戦は遺憾な事、悲しい事には違いなかった……」としんみり語っていた。私は当惑したが、「イエス、勿論戦った。然し、私はソルジャーである前にドクターという立場上、間違っても敵に対して一発の弾丸も撃たなかったし、一と太刀と雖も傷つけはしなかった」と話したら「それでいいそれでいい」と何回もつぶやくように言っていた。話のついでに私は「私

の義兄は嘗て硫黄島の野戦病院長だった」と何気なく話したら、

「オー、ワンダフル。私の弟は海兵隊の士官として硫黄島で勇敢に戦って、負傷して、アメリカ本国へ送られてから、戦傷がもとで死んでしまったのだ」と語って外人特有の大きなジェスチャーで、私の両肩を抱きすくめるようにして語り続けた。

そろそろ私も、自分の話に興奮してか次第に早口になって来たレーンの英語に僻易して来たので、気分をそろす意味で「貴女の似顔を一枚書いてあげましょう」と言ったら、「是非たのむ」との事、私がスケッチブックを開いたら、私が今度の旅行に際して、記念の為に各人国のサイン

を集めるべく常に腰に差して持ち歩いていた白扇に眼をつけて、是非その白扇に書いてくれと言ってきかない。

「デコボコしていて、これでは書きにくいから……」と言ったら、「何でもいい、貴方と私の想い出の為なのだから」と言われるままに、私は前代未聞の白扇のデコボコ面にマジックインクでクロッキー風に漫画にならない程度の彼女の似顔を、二三分で書いて渡したら、物凄く喜んでくれた。

充分なるお世辞とは知りつつも——直訳すれば、「欺くの如き素晴らしい自分の似顔を此所に於て日本のドクターから贈られた事を最上の喜び

とする」と言われて私も本当に嬉しかった。似顔書きには、いささかの自信と自惚れは持っていたが、私も仕方なく、「ノーサンキュー」を繰り返すだけだった。

そうこうする中に時がたち、私達のガーデンパーティーの用意が出来た旨の知らせがあつたので、「それじや失礼します。いずれ亦明朝にでも……」と起ち上つたら「私は今夜九時から、スペインから当地へ来ているオペラを見物に行つて、十一時頃には帰るから、是非私の部屋に来るように……」としつこいほどに言う。「お部屋の番号は？」と聞いてみたら、偶然私の左隣の部屋である。「イエス・シェア」と返事して私

は腕を差し伸べて彼女を起たせてやった。三又の杖にすがつて、トボトボと広い芝生の内庭を横切つて歩いてゆくレーンの後姿には思わず、日本語の大声で「オバアーチャーン」と呼びかけたいような親近感が漂つていた。

吾々の、其の夜のパーティーは、ふんだんに絶えまなく奏でる、心はずむ情熱的なメキシコ音楽のリズムによつていやが上にも浮き浮きとして剩え、芳淳なるテキイラとむせかえるように強烈なレモンの香りに、皆で飲み合い唄い合い踊り合い、底抜けに楽しい南国の夜空の下でのガーデンパーティーは今もって忘れ難い楽しいものだった。

パーティー終了後、私は直ちに自室に帰つて、テキイラによる顔の干照りを意識し乍らも、日記帳の整理をしはじめた。同室の岡山先生は夜の散歩に出かけられて留守、さすが、夜の十一時過ぎともなれば、部屋の寒暖計も二十六度と実に気分爽快、私は夢中になつてペンを走らせていると、コツコツとドアをノックする音、「ドクターカナリ」将しくレーンの声に、私は反射的に答えた。

——はい、只今、すぐお部屋に参ります、と。身仕度をととのえて——といつても素裸の上にボロシャツを一枚着込んだだけだが、早速私は彼女の部屋の客人となつた。

香ばしい苦味のきいたメキンココ

ーヒーを沸かして私にすすめてくれたが、私は「今頃コーヒーを飲んだら、眠れなくなるから切角だが飲みたくない」と丁寧^{ていねい}に断った。

「オーソー。それじゃこれがいい」と部屋の片隅に置いてあつたザックから一と掴かみの皮つきのままのピーナツを持って来て無難作に、テーブルの上にバラバラと音を立てて、山積みしてくれた。

「よく来た。よく来た。私はワシントンから、持病の保養の為に此所へ来て三ヶ月になるが、スペイン語は余り上手でないの、英語で語り合ひ、そして理解し合える対手が欲しくてたまらなかつたのだ」と言う。私は慌てて「ドントセイナンセン^{元談じやない}」

ス・ユーハブ^{御存知の通り}オールレディナウン。マイ・イングリッシュユイズ・ベリプアー」と言つたら「いいよいいよ、とに角私の言うことを理解さえしてくればソレでいいんだよ……」とコックリコックリ自分で訳しながら自分でうなずいている。

私は黙って合槌を打ちながら机上のピーナツを指先でパチンと割つてはポリポリ食べながら適当に返事を続けた。彼女は熱心に話し続ける。「私はニクソンが大嫌いだ。——何故なら、彼が大統領になつたら、ベトナムの戦争は終らない。彼は心からのタカ派なのだ」——とささめつけていた。

因みに私が帰国直後に彼女から受

け取った手紙の一節を、彼女には失礼かも知れぬが、抜粋して御紹介しよう。

前略 The election in the U. S. are over and to a great disappointment to me that Nixon won. I voted for mr. Humphrey as he is more liberal than Nixon, and he had an excellent record us public office. He is unfortunate in being too closely associated disastrous in VIENT-NAM. (ニクソンよりも、もっと、自由思想を持つハンフリーに私は一票を投じたが、彼は可愛想に負けた。彼は不運なのだ。ニクソンじゃ最早や、ベトナム戦争についての話し合いの場は閉じられてしまったようなもの

だ」という意味。この手紙は勿論だが、彼女との其の夜の会話のすべてを考えてみて、こんな具合に闘病生活を続けている一介の老婆ですらが選挙を通して、自分の国家のあり方を真剣に考え、そして理論整然と外人の私にすら淳々と説明するだけの見識を備えているアメリカ庶民の政治感覚が羨やましく思えた事だった。最初テーブルに置かれた、日本のピーナツの倍ぐらいもあるかと思われる程の大粒のおいしい豆の大部分を食べてしまうと、レーンは黙って立ち上って又持つて来て呉れるので、遂にはレーンは不自由な肢を運んでザックごとピーナツをテーブルの上に置いてくれた。

「日本では、この豆を「あとひきマメ」と言いましてね……」と弁解とお礼ともつかぬ事を言おうとしたが、何としても「アトヒキマメ」という英語の表現が出来ないので、仕方なしに最後の一つを食べ終った時に私は黙って立ち上って「おそくまで、本当に、御馳走様でした。おやすみなさい」とだけしか言えなかった。

私の腕時計は午前一時を少々廻っていた。ピーナツ——レーン——そして私と——まるで落語の三題噺のように、私にとってはクエルナバカのアフリカのチューリップの花の鮮烈な紅色と共に忘れ難い彼女なのである。

第三章 ヘル・ハインリッヒ・デッター

ヘル・ヨーハン・アイゼンゲッテル

赤道に近いアカプルコの暑さは格別だった。戸外の寒暖計が四十三度を示しているのを見た時にはギョツとした。さすが世界一を自称する保養地だけに、私の部屋の真下から続いている真白い砂浜からもかげろうが燃えて、その向うに白亜のケネディー一家の別荘や、淡いブルーの壁を持ったジョン・ウエインの別荘などが望見出来る。

十日余にわたるメキシコ滞在は一応のケリをつけて、明日はいよいよロスへ向けて出発というのでメキシコに於ける「最後の晚餐」会を楽し

く済ませて、自室へ帰ったが、まだ八時に一寸前——太陽の国メキシコのキャッチフレーズに偽りなし、自室のロビーから何時沈むとも知れず水平線上に停止し放しじゃないかと思われるような、まだるっこい真赤な夕陽を避けて、私はその暑さにくだり乍も、その美しさに見とれてロビーのマーモンドの木蔭のベンチに猿又一本のジャパニーズスタイルでのんびりと海浜に群れる浴客の賑わいを見ていた。連日の疲れの為か、何時とはなしに私はウトウトとしたらしい。

丁度私の部屋の角に戸外シャワーがあり、海で泳いで来た連中は必ずそのシャワーを浴びてからでない

ホテルのプールに入れない規則なので、色んな人種の黒いのや白いのや黄いろいのや、入りまじってキヤーキヤー言いながら、冷めたいシャワーを浴びてさわいでいる。ところが、そのシャワーには、押しボタンが水道管の立ち上りの根元の方にあつて仲々分かりにくいらしく、来る者すべて一応はシャワーの下に立つのだが、皆困っている。それでも、どうにかこうにか結構、ボタンを見つけてはシャワーを浴びていく様子だった。

何分ぐらい私は素裸で仮眠をむさぼっていたか知れぬが、いくらか肌寒い思いに、ハツとして吾に返った。先き程までは何時沈むとも思われな

かった真赤な太陽が殆んど紫色の残光に变つて、所謂薄暮の夕景に驚いた。その時である。

二人の屈強な白人の青年が何か愉快そうな笑い声を発しながら砂だらけの体でシャワーの下に立った。ところが、あたりがうす暗くなって来た為か、シャワーのボタンが分からないらしく——「こりやー一体どうすりやいいんだい？」と大声で話しかっている。

聞くともなしに聞いていたら、まさしく彼等の会話はドイツ語である。私は余計なおせっかいかとも思ったが——「ビッテードソツケン・ジー」（それを押せよ！）と大声で言つてやったら「ダンケ！」と二人でキャ

ツキヤツ言いながらシャワーを浴び

おえて、私のロビーの前を髪の水気ぞふりふり通るかかった。その中の背の高いチョビひげを生やした青年がいきなりドイツ語で「ケンネンジー・ドイツチュ・シュプレヒエン？」（ドイツ語がしゃべれるのですか？）と立ち止まりながら話しかけて来た。「ヤー・アーバーエスイスト・エトバス・クライン」（はい、だけどホンのちよっぴりですよ！）と私はいささか慌てておうむ返しに返事をした。

お互いにメキシコでは外国人同志であるという気安さから、私が日本の医者であるということ、彼等がハンブルグ医科大学の学生であること

もあつさりと理解し合つた。

其所から話が弾んだ——と言いたところだが、いささか英語からドイツ語への俄かに切りかえるのが仲々困難なので、まるつきり、英語とドイツ語の単語を五目飯のようにゴチャゴチャと並べて会話を続けた次第。

「俺はフエツトライビツヒだから暑くて暑くてやり切れぬ」と言つたら「ドクター、十五ペソ出せば僕等の部屋でクーラーに当らせてやるよ」と言う。

成る程そう言われて気が付いてみると、私の部屋以外の総べての部屋はピツタリと窓を閉めて、盛大なクーラーエンジンの音がしている。岡

山先生に「どうして僕等の部屋だけクーラーが無いのですかね？」というわけでまるつきり英語が駄目、スペイン語オンリーなので、身ぶり手ぶりで早くクーラーを持って来いと言うことを通じさせた。

結局はこの部屋のだけは目下修理中なので、扇風器だけで我慢してくれということを言っているらしい。

人一倍暑がりやの私が、とんだ貧乏クジを引いたものだと言つた。

仕方がないので、彼等に誘われるままに私のひとつおいた右隣りの彼等の部屋に参上した。

彼等の部屋に行つて先ず驚かされたのは、私をもてなすために、カウンターに電話してビールを持って来

い、と命じているのだが、それがスペイン語でペラペラやっているのは恐れ入った。電話を切ると、いきなり、私にドイツ語で話しかけて来る。こちらのドイツ語がそろそろあやしくなつて来ると、今度は英語で語かけて来る。ボヘミアセルベツサー（ビール）を飲みながら語は弾んだ。

彼等はハンブルグ医大の三年生だというが、既に日本で心臓移植手術に成功したことを知悉しており、日本の医者を以って任ずる私ですらもその術式の評価を知らないのに、彼等は実に良く知っていた。却って私はドイツの医学生に日本の心臓術式を、計らずもメキシコのホテルで御

教示を賜った次第、誠に汗顔の想いだったが、その反面ドイツ医学の底の深さを泌み泌みと思わされた次第である。

私の方からは、私の徒弟がハンブルグ医大の耳鼻科で七年間も講師をして先年帰国した事や、そして、又彼等からは、目下ハンブルグに留学中の二人の日本人留學生が実に優秀である事や——話はソレからソレへと仲々にして進まなかつた。最後に、恐らくはあのドイツの敗戦の辛さを知らないだろう筈の若者には一寸と可愛想な質問だとは、思ったが「一体君達はヒットラーをどう思うか？」と聞いてみた。この話になった途端、二人ともいきなり早口のドイツ語で

まくし立てるのには閉口した。

然し彼等はキツパリと断言した。「ヒットラー——ソレはゲルマンの史上に残る人物である事に間違いはない。彼のメトード（方法）が間違つていたのであつて、だが然しドイツ国家のユーバーアーレス・ドイツチェランド（世界に冠たるドイツの精神）だけは受けついで、吾々若者すべては、祖国の為に全力をふり絞っているのである」

現在の彼等にとつては、医学の勉強に全力を尽すことが祖国ドイツを復興させる事に通じているのだ、と強調しているのである。学生時代怠け通しだった私にとっては、実に彼等はよくも勉強しているなあという

のが実態だった。それにつけても、朝方読んだ英字新聞に載っていた日本の「新宿事件」のスケジュールデントパワーの全学連暴動の記事を憶い合わせて、何とはなしにゲルマン民族と大和民族の底に流れる魂の動きの差に私は慄然とする想いだった。

四年後にミュンヘンでキット再会しましうと固く握手して別れたのは、午前二時に近かった。英語・スペイン語を巧みに使い分けて、レジャーと勉強を兼ねてメキシコまで旅行に來ているドイツの医学生に、心臓手術の事を教えて貰ったり「俺達是世界一の若者だよ！」とうそぶかれたり心中私はおだやかならぬものを感じざるを得なかった。

四年後に、ミュンヘンで彼等に会った時に私は相も変らぬ日本のカントリードクターであるに反して、きつと彼等は今日の彼等よりもつとつと成長した素晴らしい医学者になつてゐるんじゃないかな、などと思つと、何とはなしにジットしていられない気持ちだった。

うす茶色のコーマン式のチョビヒゲを生やしたゴツイ顔のハインリッヒと童顔のシルバークレーの頭髮と鋭い鼻柱を持ったヨーハンの顔が――何時までも何時までも私の眼の前にダブリ合つて、私にとっては矢張り忘れ難かった。

思い出のメキシコ

塙 やす子

「メキシコは如何でした。ご無事にお歸りになれて良かったですね」

狭い町の事とて、会う人毎に挨拶されます。それも道理、オリンピック、ク三日目の男子バレーボールの時に、日本が快勝した嬉しさの余り観覧席で立上つて日章旗を振っている主人と私がテレビに映されたのでした。おやとばかり、お友達も家の者も親戚中へ電話するやらされるやらで大騒ぎをしたらしいのです。私もこの宇宙時代に早速にも宇宙中継の電波にのりました事が嬉しくて「メキシコ人はとても朗らかで、其の上気候は年中良いし、空は澄んで青葉が美しく花の色があざやかで」と、よい気持ちで土産話を語つて居ります。本当に誇張なしに言つても私の今

迄の旅行の中で此度の旅行程楽しく珍らしく印象深かったものはありません。何にもまして旅行会の方々の行届いて親切なお世話と団員皆皆様の温い友情と親和の賜ものと深く感謝申上げて居ります。私共のような老人はさぞ足手まといに思召されたでしょうに、終始何かとおやさしくお勞わり下され、其の度毎に頭の下がる思いでした。バスに乗る時は最後から乗車する私共のために、いつも最前列の特等席を明けてお待ち下さるのでした。毎度の事で申訳なくして私がお礼を申し上げると、後の方の誰方かが、バスが衝突した時には真先きに塙さんがやられますよ、と言つて、私の心を軽くさせて下さるのでした。こうした皆々様のおやさしいお氣持に対して御礼の言葉もななくお報いするすべもありません。せめてこれからはすべての人々に此の身に出来る限りの親切を尽くしてと

心に誓つた次第です。本當に有難うございました。この誌上をおかりして主人共々厚く御礼を申し上げます。何となく決死の覚悟で乗つた飛行機も乗つて見れば少しの不安も覺えず、むしろ新幹線より乗心地がよかつたようです。飛行機ならでは思つたのはメキシコシテアの夜景でした。今迄暗い雲海の上をとんでいたのが其の雲をつき破つて降下したとたん、パツと限界に開けたものは赤青黄紫とあらゆる色に光り輝やく寶石を隙間もなしにちりばめたような豪華で目の醒めるような景觀に、思わず全員拍手喝采をしてしまいました。何と心憎いまでに計算された演出よと、メキシコの第一印象は百点満点と評価したのでした。次いで、空港へ降り立つた時、意外にもお寒いのと、肌色の違う巨人達にもみ苦茶にされた上、「スリが沢山居るから用心なさい」との御注意にハンド

バックを抱え込んで震えていた事は忘れられません。

四年前から積立金をして期待していたオリンピック開会式は予想以上に素晴らしいものでした。世界中の若人がオリンピック目指して鍛えに鍛えた技を競うために、こんなにも沢山にメキシコへ集つたのかと何とも言えぬ頼もしさと心強い充実感を味つたのでした。

競技場の素晴らしさもさる事ながら、堂々たる入場式の力強さ。女子聖火ランナーの聖火台点火の感激。空中に羽ばたく鳩の大群。空一杯に舞上る赤青黄の風せん。もうだれもかれも夢中になつて手を叩たき足を踏みならし、場内満員の八万の觀衆は完全に一つに溶け合つた光景でした。あの感激はととても忘れられぬもので、世紀の祭典の言葉がピツタリと思つた事でした。重量あげで三宅兄弟の優勝は夕方だったので、

私共は引籠つて出掛けなかったため、此の目で見なかった事は今も残念に思つて居ります。

レホルマ通りの美しさはメキシコを語る時に第一に取上げる事にして居ります。悪魔が走つていとも思える日本の道路しか知らない私は公園かしらと思つた程でした。綺麗に刈り揃えられた緑の芝生をはさんで三車線の往復、其の両側に又も芝生と木立ちと歩道があり、そしてここここにゆつたりとした噴水や或は大きく見事な彫刻が立ち、それらを取巻く色とりどりの花花。その道路をスムーズに車が走っていました、其の車が割合立派なものが少なく、ポンコツらしいのが目立つたのは何を物語るかと思議でした。ダットサンの店の前を通り過ぎましたが、他人でないような気持ちになりました。

テイテイフカンのピラミッドを見

学しました。ピラミッドは太陽の神殿、月の神殿の二つあり、紀元前八百年に造られたもの。今から三千年程前に比の土地に生活して居た人々の有様が色々と想像されて去り難い思いでした。

足弱の私共は頂上へ登らないで皆様のお戻りを待つて居ると、麓のトイレの前の大きな木を取巻く円い花壇一面に紫のスマイレが咲いて居ました。そのスマイレにホースの水をそそいでいるトイレの番人に手真似でスマイレの名を尋ねますと、「ニレポナール」と答えて、三、四本摘んで私の胸に挿してくれました。記念の彼の写真と押花にした「ニレポナール」は今もあざやかにあの日を思出させてくれます。

クエルナバカの一三ホテルも忘れられないものの一つで、ホノボノとした思出を与えてくれます。あの日宿泊した私達十人のために温かく

心を籠めてサービスしてくれたコックさんのために、各自の名前を寄せ書した日の丸の旗を贈りました。今もコバルトのプールをバックにして楽しく食事をする客人の頭上にはためいているかしらとなつかしくなります。客室の頭上には重々しいシャンデリヤが下がり、足元には立派な毛皮が敷かれ、見事な彫刻に飾られたベットに横たわつて居ると、突然物凄い音。ハツとして聞き耳をたてている中に雷鳴と気が付いた、さてもメキシコの雷は短気者よとおかしくなりました。

明方近い頃、意外にも「コケコッコー」とのどかな声が耳に飛込んできました。近頃は私共のような田舎でさえ雄鶏は飼いませので、久し振りに聞いたのでした。この立派な部屋とコケコッコーが何とも結び付かず、とん智のきく人なら何とオチをつけるかしらなど考えたのでした。

記念にと頂いた二個の小さなかめと紙紐でつくった馬は今日も茶の間の飾棚に並んで、私にほほえみかけて居ります。

クエルナバカからタスコへ向うバス窓から、あれがスペイン風を今も残している「タスコ」と言われて眺めた風景は何故か私に始めて異国に來たとの実感が湧いたのでした。昔読んだ外国小説の一場面が頭に浮かんだのです。石畳の坂道。とがった屋根の寺院。レンガの塀等味わい深いものが沢山ありました。タスコの高い丘の上のレストランでの昼食も忘れ難いものです。メキシコに在住して居られる荒井様御夫婦が私達のために案内をして下され、其の上沢山におにぎりを御持参下され御馳走になった事でした。そのおいしかった事、御飯に飢えていた私には山海の珍味にもまさるように思われたのでした。日本から取寄せられた味

噌漬や梅干や海苔等は遠い異国では得難い貴重品でありましようにと、深く感謝申上げたのでした。

クエルナバカからアカプルコへ向う途中の見渡す限りの大広原も珍らしかったです。地味のよいところは広々と耕やされ、米やとうもろこし、さとうきび、綿等が作られています。又、大きなサボテンが点々と立ち並んでいました。インドオの子供らしいのがとかげを両手にぶら下げて買ってくれとバスの前に立ちます。バスを降りてそのとかげを借りて記念撮影をしました。

アカプルコは太平洋岸の海水浴場でケネディの別荘をはじめ有名な俳優の別荘等海岸近くに建ち並んで、絵のような景色でした。夕方ホテルの室から眺めると金色の光りをキラキラと海面に映し乍ら今まさに没しようとする太陽と、金色のくまどりをして長くのびた水上線上の黒い雲

とを若しやと思つてシャッターを切った私のカラーカメラは、意外にもうまく其の絶景をとらえてくれました。又、遊覧船内で海賊を装った写真屋の撮った写真は、マア何と商魂たくましい事よと眉をひそめ乍ら買わされたものの、今となつては良い思い出となり、いずれも旅行記念アルバムの一頁を飾つて居ります。

ロサンゼルスへ飛んでハリウッドでのユニバース撮影所見学は聞き手が若い人の時の土産話です。皆羨しそうに聞いてくれます。

ハワイ観光で一番印象に深かったのはアーリントン基地でした。第一世界大戦以来の戦死者二万人以上が葬られているそうです。見渡す限り広い芝生に整然と墓石が埋め込まれていました。殊にベトナム戦死者らしい墓の前には生々とした綺麗な花が供えられていました。涙にくれながらこの花を供えたであろう遺族の

人々の姿も想像されて、胸ふさがる
思いでした。戦争は絶対に厭やです
ね。

有名なワイキキ海岸では水泳や水
上スキーを楽しむ人や砂浜にたわむ
れるアベック等が目立ちました。又、
原色で着飾り賑やかな音楽にのって
踊りまくるフラダンスも珍らしく、
それを見るための観覧席にズラッと
腰掛けた世界各国人のあざやかな衣
装の色とりどり等、此の世の歓楽の
縮図を見る思いがしました。比の人
達とは正反対の生活をしている人も
ある事を考えると、ハワイは私には
何となく馴じめぬ思いを抱かせまし
た。

十五日の旅程を恙なく終えて羽田
空港に降り立った私は未だ夢心地で
した。この年齢でよくぞ十五日もか
けて地球のあちら側まで見物して、
無事に帰れた事よと嬉し涙が出たの
でした。

美術部部員が個展を開催

白矢 勝一

昨年末に当クラブ美術部の部員でいらつしやる先生方の個展が各所で開催されました。

平成27年11月21日(土)から27日(金)に都内練馬区にあるギャラリー古藤にて、『第30回 野口眞利油絵展』が開催されました。会期中にはピアノの生演奏や「生活筋トレ実践指導」などのイベントも催され、バラエティに富んだ素敵な個展になりました。私もイベントに参加させていただきましたが、ピアノの生演奏に合わせてシャランソンが歌われたり、野口先生も歌声を披露してくださったりして、大変盛り上がりつていました。私もその舞台に招かれ、恥

ずかしながら一曲披露させていただきました。

会場にはワインやソフトドリンク、軽食等があり、お花もたくさん飾られていて、来場者の方々もとてもしそうに参加されていました。油彩展は、野口先生独特の優しい色合いの油絵はもちろんのこと、野口先生の著書なども展示しており、拝見しているうちに瞬く間に時間が過ぎて行きました。

会場で配られていた『ご挨拶』文をととても興味深く読ませていただいたので、ここにご紹介させていただきます。

ご挨拶

☆ ☆ ☆

ひとつの目標 30回展

私の父・千束は103歳で亡くなりましたが、江古田ギャラリーフォレストで初めて個展を開きました。これ

を契機に私も出来るのではないかと、同じ所で個展を開催。それから銀座セントラル・光が丘美術館・江古田のギャラリー古藤と油絵の発表を行って参りました。私は12回展の頃だったか、気落ちして毎年展覧会を行わず、隔年にしようとも思いましたが、NHKでも有名な着物デザイナー木村孝さんの激励もあり、その時から30回展は、私にとってひとつの目標となっておりました。

いよいよ30回展であり、私には感無量であるが、いろいろお世話頂いている皆様には、厚くお礼申し上げます。

終わりなき戦い

絵を描くことは“終わりなき戦い”である。完成のつもりが、サインも終わったり、写真を撮ったりしてからも筆を加えなくてはならない。この機会に最近描きながらいろいろと

意識している美の構成をまとめてみたい。

①色合いとしては、オレンジ、黄、赤などの情熱色に加えて補色表現。

②構図には太いやグラを組み立てる。大胆な線や細目の洒落た線を生かす。

③モチーフとして、酒好きのワインルート、音楽や人の情緒表現、巨匠ゆかりの里、キリスト教の歴史や文化などに求めている。

④また、目に見えないものとして大気・空気の風の流れ、遠近、表と裏などを取り入れる。

今は、意識のうちであるが、これが無意識にやれる事を、これから目標にしたい。

絵を描くエネルギーと生活筋トレ

一般的に、集中力は1時間半が限度といわれています。疲れている時いくら描いても無駄。休憩も必要。でも、私の主張する生活筋トレで筋

肉をつくと、エネルギーが湧いてきます。皆さんも是非、活用して頂きたい。

絵の一族

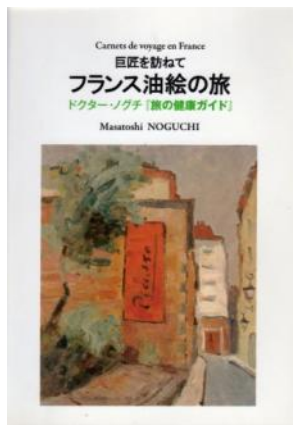
私の母の兄・寺本忠雄は挿絵、また従軍画家でした。私の父・千束も103歳まで描いていたし、父の弟・新も、私の亡くなった姉・和子、一水会で活躍中の妹・春枝そして慶子もみんな頑張っている。この遺伝子には、私も感謝している次第です。

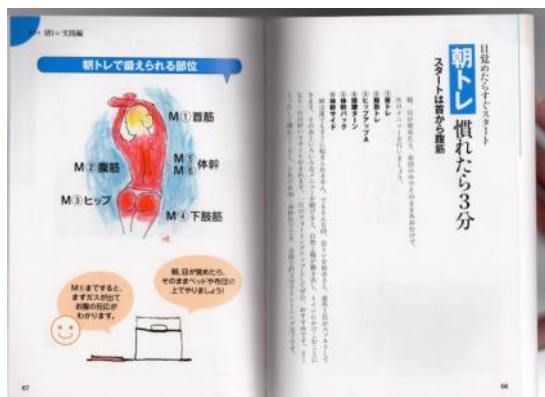
2015.11.21 野口眞利

☆ ☆ ☆



②(ウアン・ド・ボストロー "Vie de Bonheur")
ピナノ生演劇の舞台にワイン (2014) の背景に置ける。ショー・ウイン
グの衣装に似ていて、左側に、右側に、Vie de Bonheur、右側に、Vie de
Bonheur と書かれている。新しいカーブをもちいたような見方した。





野口眞利先生は今年九月一日(火)から七日(水)に新宿の京王百貨店京王ギャラリーにて個展を開催予定との事。機関誌でも是非またご紹介させていただきたいので詳細を楽しみにしています。



平成27年11月23日(月・祝)から28日(土)には東京銀座の銀座文藝春秋画廊B1F『ザ・セラー』にて白幡雄一先生と奥様の祐子様の『二人展』が開催されました。

こちらのお二人も毎年医家美術展に素敵な作品を出展されていて、今回の個展にもたくさんのお二人の油彩画とパステル画の作品が展示されていました。個展は二回目だそうです。ご夫婦で共通の趣味を持ち、個展を開催されているとのこと、とても

素敵な人生を過ごされているように羨望いたします。

会場となった『ザ・セラー』はとても素敵な画廊で、カウンターがあり、ワインやソフトドリンクなどが用意してあり、そこで奥様の白幡裕子氏の料理とお酒とともに白幡雄一先生とは絵画の話で二時間以上も語り合い、時がたつのも忘れて色々なお話をさせていただきました。

裸婦画を主に描かれている白幡雄一先生ですが、裸婦画は背景が大変難しく、先生も毎回悩まれているとのことでしたが、展示してある作品を見ると、どれも裸婦を引き立てる様な素敵な背景が描かれていてとても敬服しました。中でも「豹」が背景に描かれている作品があったのですが、それは素敵な作品でした。

奥様の白幡裕子氏の作品はパステル画が主でとてもやさしいタッチと

色合いの作品で見ていると心穏やかな気持ちにさせてくれる作品です。過去に医家美術展に出展されていた作品も数点飾られていたので、いくつか掲載させて戴きます。



白幡雄一先生（医家美術展作品展品）



白幡裕子氏（医家美術展作品展品）



今年の秋にもまた医家美術展を開催予定なので、先生方の新たな作品が見られるのが楽しみです。素晴らしい作品に囲まれ素敵な時間を過ごさせていただきます。ぜひ皆様も足をお運びください。

透視像



太田 伶

敗因

昨年のスポーツ界では意外なことが二つあった。一つはラグビーで日本が南アにかつたことである。にもかかわらずスコットランドに大敗して、予選で三勝一敗であったのに本戦に進めなかったのは更に意外であった。

二つ目は野球の侍日本が優勝できなかったことである。予選リーグを全勝で通過し、その時勝っていた韓国に本戦のトーナメントに負けるとは。予選では韓国に5―0で勝っていた。しかも本戦ではその韓国を七回まで一安打無失点に押さえこみ日

本は3―0とリードしていたのである。その時点で日本が韓国に負けるとは誰も予想しなかったであろう。日本が負けたという口惜しさより99%勝つべきものが負けたという意外性に何とも理不尽なものを感じたのであった。

さて、敗因は。誰しも大谷を続投させなかったことだと云うであろう。つまりこの時点で日本は勝つたと思つたのである。大谷の肩を休ませるためだという人もいた。そして継投の則本が八回を零封したことで勝ち益々確実となった。九回始めに則本を交代させる機運を失つたのである。さらに六、七回のチャンスで日本が加点できなかったこともあとになつてみれば大きな敗因と云わざるを得ない。

いずれにしても勝勢が即勝のことではない。将棋でも敵王を追いつめてから一手ゆるめるとそこで逆転す

ることはよくあることだ。つまり勝利を得るためには弱つた相手に最後のトドメを刺さなければならぬ。平家は頼朝を見逃したために滅亡した。戦国時代敵城主を討ち取つた後はその一族を草の根を分けても皆殺しにするなどこの上なく残酷なことだと思つていたがこれこそが当時の正しい戦略だったのである。つまり侍日本の敗因は勝勢に甘んじてトドメを刺さなかった、いや刺せなかったことなのである。

編集後記



会員の皆様、あけましておめでとうございます。発行が遅くなつてしまい御迷惑をおかけいたしました。今年もどうぞ日本医家芸術クラブをよろしく願ひいたします。(ES)